慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済思想としての井原西鶴
Sub Title	Ihara Saikaku as an economic thought
Author	小室, 正紀(Komuro, Masamichi)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2015
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.108, No.2 (2015. 7) ,p.275(5)- 308(38)
JaLC DOI	10.14991/001.20150701-0005
Abstract	井原西鶴は, 1680年代から90年代にかけて, 町人を題材とした作品を残しており, そこからは, 西鶴の経済思想が析出できる。しかし, 従来の研究は, その思想を必ずしも当時の経済と適正に結びつけて考察していない。本稿では西鶴の時代を, 市場経済と都市社会が展開をしはじめ, それが権力に妨げられることが比較的少なかった成長期と捉え, その中で西鶴が, 市場と都市の本質について, その光と影の両面を鋭く見つめていたことを明らかにする。 Ihara Saikaku was one of the most famous novelists of the Edo Period. He wrote many popular storybooks concerning the lives of townspeople in 1680s and 90s, wherein we can discover his economic thoughts. However, previous studies have not clearly explained his economic thought because of the improper knowledge of economic history. This study considers the second half of the 17th century as a period of new economic growth, wherein the market economy and urban society were beginning to develop. Though Saikaku felt the life in this new society as rootless and somehow false and thought the life of agrarian people as real human, he advocated concerning the aggressive economic life of townspeople. This study clarifies Saikaku's such ambivalent thoughts regarding economic circumstances.
Notes	故岡田泰男名誉教授追悼特集 : 経済学部における歴史研究 : 日本, アジア, そしてアメリカ
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20150701-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」108 巻 2 号（2015 年 7 月）

経済思想としての井原西鶴

小室正紀*

Ihara Saikaku as an Economic Thought

Masamichi Komuro*

Abstract: Ihara Saikaku was one of the most famous novelists of the Edo Period. He wrote many popular storybooks concerning the lives of townspeople in 1680s and 90s, wherein we can discover his economic thoughts. However, previous studies have not clearly explained his economic thought because of the improper knowledge of economic history. This study considers the second half of the 17th century as a period of new economic growth, wherein the market economy and urban society were beginning to develop. Though Saikaku felt the life in this new society as rootless and somehow false and thought the life of agrarian people as real human, he advocated concerning the aggressive economic life of townspeople. This study clarifies Saikaku's such ambivalent thoughts regarding economic circumstances.

1. はじめに——本稿の課題——

井原西鶴は江戸時代文学を代表する作家の一人であり，国文学としてその作品を扱った研究には膨大な蓄積がある(1)。その研究史の延長線上で，西鶴論に一石を投じることは門外漢である筆者の能力を越えたものである。ただ，多くの西鶴研究を読んでいると，経済史研究あるいは経済思想史研究からはやや違和感を感じる解釈もある。

＊　慶應義塾大学
Keio University

(1)　それらの業績については，白倉一由『増補改訂西鶴の文芸』（新典社，1984）所収「西鶴文芸研究文献目録」，江本裕・谷脇理史編『西鶴事典』（おうふう，1996）所収「研究文献目録一覧」，『西鶴と浮世草子研究』Vol.1〜5（笠間書店　2006 年〜2011 年）所収「西鶴と浮世草子　最新文献ガイド」「西鶴・浮世草子研究文献目録（稿）」。

例えば西鶴研究の第一人者である谷脇理史が，一般読者向けに書いた『西鶴を楽しむ 2　経済小説の原点『日本永代蔵』』の「あとがき」では，「『日本永代蔵』は，一六八〇年代という太平の時代，と同時に，徳川政権確立後の右肩上りの経済成長に陰りが見える状態となった時代を背景として書かれた作品である[(2)]」と経済史的な時代背景が説明されている。『日本永代蔵』の成立年は元禄元年（1688）である。ちなみにその他の西鶴の町人物の代表作は，『世間胸算用』が元禄 5 年（1692），『西鶴織留』が元禄 7 年（1694）の成立である。この時期を「経済成長に陰りが見える状態となった時代」というべきなのだろうか。

もし，17 世紀における経済成長のピークを元禄・宝永改鋳による貨幣流通量の増大とそれに伴う好況とするならば，その改鋳は元禄 8 年（1695）からである。この一連の改鋳では，貨幣量の著しい増大にもかかわらず，宝永改鋳の末期（1710 年頃）までは経済に深刻な影響を与えるほどのインフレも起きず，むしろ一層の好況を来したと考えられる[(3)]。西鶴の町人物の代表作は，いずれもこの元禄改鋳以前に書かれたものであり，その時代は，必ずしも「陰りが見える状態となった時代」とはいえないだろう[(4)]。このように西鶴の作品に見られる経済思想は，経済史的な事実と付き合わせて再検討する必要がまだある。

また，西鶴の思想を，ヨーロッパにおける歴史を基準として，余りにも決まりきった形で考えてしまうという問題もある。例えば，かつて丸山真男は，西鶴の時代の町人を「悉く封建的権力の寄生者でありその利潤獲得は決して正常的とはいひ難くむしろ暴利資本主義（Wucherischer Kapitalismus）の性格を濃厚に帯びてゐた」と述べ，また西鶴の描く町人の精神を，「町人がいまだ，「中産階級（ミドル・クラス）」を形成しえなかった如く，「町人根性」もマックス＝ウェーバーの意味するような――産業資本の心理的発條としての――資本主義精神からは遠く離れてゐた」（傍点は丸山）と性格づけた[(5)]。しかし，西鶴の作品には，このような性格付けからは見えてこない精神もある。たとえ西鶴の時代の基本的性格を丸山がいうように解釈できるとしても，作家がその基本的性格を代弁しているとは限らない。むしろ西鶴のような作家の場合には，基本ではない部分に目を向けている場合もある。また，歴史は変わってゆく部分と，後の時代の萌芽といえる部分がある。上に引用した丸山の言葉でいえば，「封建的権力」「暴利資本主義」「中産階級」などという概念は特定の時代にあてはまる。しかし，例えば都市化とか市場化といった概念で捉えられる現象は，西鶴の時代に進展し，さらに後の時代にまで引き継がれていった。西鶴は時代のそのような面を見ていた可能性もある。

本稿では，以上のような問題点を考え，西鶴作品のテキストを経済史的事実と突き合わせながら

---

(2)　谷脇理史『西鶴を楽しむ② 経済小説の原点『日本永代蔵』』清文堂出版，2004，p.303。

(3)　拙稿「江戸時代の貨幣政策論争――元禄・享保期を例として――」『三色旗』753 号，2010。

(4)　夙に，野村兼太郎「西鶴時代の経済生活」（『国文学 解釈と鑑賞』18–1，1953）で，西鶴の時代は成長期とされている。

(5)　丸山真男『日本政治思想史研究』東京大学出版会，1952，pp.126–127。

再検討し，西鶴が時代のどのような部分を如何なる視線で見ていたのかを考察する。また，時代への西鶴の視線と結びつけて，彼の経済に対する感覚や精神を捉え直してみたい。

2. 西鶴とその時代

(1) 西鶴の経歴

西鶴の経歴については，野間光辰『補刪西鶴年譜考証』[6]に詳しい。その後，野間の研究を基として，西鶴の出自について林基が「西鶴出自研究史の最後の言葉」で詳しく検討している[7]。ここでは，基本的に野間と林によりながら，本稿で必要な範囲内に限り，簡単に西鶴の経歴をたどっておこう。

生まれは寛永 19 年（1642）。出自については，藤村作が紹介した[8]伊藤梅宇（天和 3 年［1683］～延享 2 年［1745］）の『見聞談叢』の中の次の記事が，およその基本となっている。

> 「貞享元禄の比，摂の大坂津に，平山藤五と云ふ町人あり。有徳なるものなれるが，妻もはやく死し，一女あれども盲目，それも死せり。名跡を手代にゆづりて，僧にもならず世間を自由にくらし，行脚同時にて頭陀をかけ，半年程諸方を巡りては，宿へ帰り，甚俳諧をこのみて一晶をしたひ，後には流儀も自己の流儀になり，名を西鶴とあらため，永代蔵，又は西の海，又は世上四民雛形など云ふ書を作れるものなり[9]」

この記事では，西鶴は，富裕な商人であったが家業を手代に譲り，自由な立場で旅と俳諧と草紙著作に暮らしたとなっているが，いかなる商人であったかは不明であった。ところが，昭和 53 年（1978）になり森川昭により東海道鳴海宿の問屋下里勘兵衛（俳号は知足）の日記や書簡などが紹介された[10]。知足は，大坂を介して諸物品を仕入れる問屋で，造酒屋でもあり，俳諧で西鶴と交流もあった。野間は，この資料に基づき西鶴が大坂の商人日野屋庄左衛門（世襲名）であった可能性を示唆した。この示唆を受け止め，林が下里関係の資料を関連資料とともに再検討し，西鶴が日野屋庄左衛門であることを傍証した。現在までのところこの説を否定するような異論は出ていない。

大坂の案内記『懐中 難波すゞめ』『難波鶴』などを使った野間や林の検討によれば，代々の日野屋庄左衛門は，一等地である天神橋南詰（現中央区北浜東 3 丁目の日本郵政ビルの場所）に店を構える江戸買物問屋で，町年寄役や紀州家蔵屋敷名代を勤めた有力な商人であった。

西鶴は，この家の嗣子で，若い頃には，商売の見習いのためか，日野屋と取引もあったと想像さ

---

(6) 野間光辰『補刪西鶴年譜考証』中央公論社，1983。
(7) 林基「西鶴出自研究史の最後の言葉」『西鶴新展望』（勉誠社，1993）所収。
(8) 藤村作「井原西鶴は平山藤五か」『国語と国文学』第 6 巻 1 号，1929。
(9) 伊藤梅宇『見聞談叢』岩波文庫，1940，p.243。
(10) 森川昭「西鶴と知足」『ビブリア』68 号，1978。

れる足皮(たび)屋に奉公に出たが，店の金を使い込んで出奔する事件を起こした。西鶴作品の登場人物を思わせるような不祥事であったが，店の主人が「哀れがり」呼び戻して許したと資料にある[11]。その後，日野屋を継ぎ庄左衛門を称えたと考えられるが，妻や娘が早く亡くなり延宝 3 年（1675）には頭を丸め法体となり店を手代に譲り，文芸の生活に入ったようである。

なお林によれば，この日野屋庄左衛門の本家は京都の日野屋甚太郎であり，その甚太郎店の同町内には，伊藤仁斎（鶴屋七右衛門）の本家と思われる呉服問屋鶴屋清兵衛の店があり，それと背中合わせに仁斎の家もあった。このことから，仁斎の次男伊藤梅宇が西鶴のことを記していたのも頷ける。また，西鶴の作品に登場する儒者は極めて少ないが，その一人として，伊藤仁斎が出てくることも両家の関連を想像させて興味深い[12]。

西鶴の文芸活動は，大きく前後に分けられる。前半は俳諧師であり後半が浮世草子作家である。十代のころから俳諧に親しんでおり，まだ日野屋の主人であったと思われる寛文 6 年（1666）頃からさまざまな句集に句が採録されるようになり，延宝期以降（1673 年～）は自らも多くの句集を刊行した。中でも，西鶴を有名にしたのは，矢数俳諧という催しの考案と興業である。それは聴衆を集め，夜明けから日暮れまで，あるいは一昼夜などと時間を限定して，その間にどれだけの俳句を吟じられるかに挑戦をする一種の催事であった。最初は延宝 5 年（1677）に大坂生國魂神社で一昼夜に 1,600 句を吟じた。その後，延宝 8 年（1680）には，再び生國魂神社で一昼夜に 4,000 句という記録を作り，さらに貞享元年（1684）には，大坂の住吉大社で，一昼夜に 23,500 句という人間業とは思えない速さと数の独吟を行った。

西鶴の伝記を書いた森銑三は，生國魂神社での二回の矢数俳諧で吟じられた俳句は質としては決して高くないとし，また住吉大社の場合は，句そのものは記録に残されてないが，その数からして俳句としての質は「殆ど鑑賞には値しないものばかりだったであろう[13]」と判断している。しかし，それにしても，一昼夜に 23,500 句を吟じるというのは，言語能力の点で極めて頭の回転が速い人物であったことを示している。

この経歴からは，俳諧としての西鶴は，不特定多数の聴衆・読者を意識し，彼らを驚愕させ唸らせることを考えていた職業的俳人ともいえそうである。こうした外連味のある俳諧師であったため，異風の俳諧として自ら「阿蘭陀流」を称えていたが[14]，批判者からも「阿蘭陀西鶴」あるいは「ばさ

（11） 石川了「紀海温門人哥縁斉貞堂――西鶴逸話の紹介と翻刻『狂歌松の隣』――」『大妻国文』10 号，1979。野間光辰は前掲書で，この論文で紹介された紀海音の『住吉秘伝巻』の中にある，西鶴の足皮屋奉公に関する記事を考察している。野間の考察では，西鶴が奉公した足皮屋は，大名や大商家の注文を受けて革足袋を製造卸売りをする大店で，日野屋からも近い上町の北革屋町（現船越町一丁目）にあった。

（12）『日本永代蔵』巻二の三「才覚を笠に着る大黒」では，町人として役に立たない諸芸の一つとして，「朝に伊藤源吉に道を聞」ということが出て来る。伊藤源吉は仁斎のこと。

（13） 森銑三『井原西鶴』（人物叢書）吉川弘文館，1958，p.128。

れ句の大将」などと呼ばれ低く評価された。[15]

浮世草子作家としての活動は，俳諧師としての時期の末期と重なって始まる。最初に主に書いたのは好色物といわれる一群の作品である。敢えてまとめれば，愛欲・性欲を人間の当たり前の姿と捉え，それを抱えて過ごす人生が主題となっている。この分野の代表作は，天和 2 年（1682）刊の『好色一代男』，貞享 3 年（1686）刊の『好色五人女』，『好色一代女』などである。

続いて，晩年の時期に多く書かれているのが，町人物である。町人物は，主に町人の致富と没落，金の世の中で生きてゆく人間の諸相を描いた作品群といえるだろう。金と人間という点では，貞享 3 年（1686）の『本朝二十不孝』にも，その一端は出ているが，本格的には，元禄元年（1688）刊の『日本永代蔵』，元禄 5 年（1692）刊の『世間胸算用』，没後の元禄 7 年（1694）に遺稿として刊行された『西鶴織留』などがそれに当たる。

なお町人物と前後して，『武道伝来記』（貞享 4 年［1687］）や『武家義理物語』（元禄元年［1688］）など，意地に生きる武士の姿を描いた武家物といわれる作品群もある。

ところで，これらの文芸活動を行っていた時期の居所は，遅くとも延宝 7 年（1679）以降は，大坂鑓屋町（現中央区鎗屋町）であったと考えらている。[16] ここは天神橋南詰の日野屋庄左衛門店から 1 キロメートル前後の所である。亡くなったのも，この鑓屋町で，元禄 6 年（1693）のことであった。辞世の句は，「浮世の月 見過ごしにけり 末二年」。人間一生五十年といわれた当時の寿命より二年長生きしたという句であり，数えで五十二歳ということである。鑓屋町から南へ 2 キロメートルほどの誓願寺に葬られた。

(2) 西鶴の作品をめぐる問題

西鶴の浮世草紙については，本当に西鶴の作品であるのか疑義があるものもあるという。没後の刊行物は門人の北条団水が編纂したことが明示してあるものもあるし，生前の作品でも団水や，やはり門人の西鷺軒橋泉が代筆したものがあるとする論者がいる。例えば，文政・天保期の柳亭種彦は，『好色五人女』は西鶴作とは見ていない。[17] 明治期の幸田露伴は，『本朝櫻陰比事』は文章の拙さから考えて西鶴の作ではないと判断していた。[18] 中でももっとも極端な説は森銑三である。森は，完全な西鶴の作品は『好色一代男』のみであり，その他は，一部が西鶴の筆であるか，あるいは団水

（14） 前掲『補刪西鶴年譜考証』（pp.128–129）によれば，『胴骨三百韻』の西鶴序で「あらんだ流」の異名を自称している。

（15） 同上（pp.195–197）によれば，中嶋随流『誹諧破邪顕正』で「阿蘭陀西鶴」，松江維舟『俳諧熊坂』で「ばされ句の大将」と蔑称されている。

（16） 延宝 7 年（1679）に出た『懐中難波すゞめ』に俳諧点者として「鑓屋町　井原西鶴」とある。

（17） 柳亭種彦は『好色本目録』（『新群書類従』第七書目収録）で『好色五人女』について「西鶴が作に似て面白し」と評している。

（18） 幸田露伴は『蝸牛庵夜譚』（春陽堂，1907）p.120 で「おそらくは他人の作ならん」と述べている。

や西鶩が書いた物を西鶴が編集したり序文をつけたりしたものか，さらに完全な団水作であるかだと主張している[19]。また近年，井田進也は，西鶴と北条団水の書き癖を分析して，個々の作品の作者を判定することを試みた[20]。井田の判定は森に近いもので，西鶴作といわれているかなりの作品に疑問符をつけている。

筆者は文学作品としての質を判定することに関しては素人ではあるが，その素人の目から見てもたしかに余り出来のよくない作品も混ざっているような気がする。しかし，本稿では，西鶴の作品であるか否かの真贋は問題にしないこととしたい。本稿の分析にとっては，ある時代にいかなる経済思想があったかが重要であり，その作者が誰であったかは二次的な問題だからである。何を主張したかったかが関心事であり，文学上の質は一先ず置いておくことができる。また，ある作品が団水あるいは西鶩の筆であったとしても，彼らは西鶴の門人であり，その作品は，いわば西鶴工房により生み出された一組の作品群として，十分に意味ある分析対象となるからでもある。

第二の問題は，作品の時期分けである。西鶴の浮世草子に関しては，例えば，貞享末年頃に，作品のテーマが好色物から雑話物・町人物へ変わることを見て，そこに西鶴の関心の転換を考える場合がある。また，町人物に関しても，このジャンルとしては初期の『日本永代蔵』では富の獲得に邁進する町人を描く場合が多かったが，『世間胸算用』など後期になると，金の世に生きなければならない中下層町人の哀感にテーマが移るといわれる。例えば，西鶴研究の泰斗暉峻康隆や富士昭雄は，この間に西鶴の視点が上層町人から中下層町人に移ると論じている[21]。

しかし，このような見解に対しては，異論も出ている。例えば，広嶋進は，『世間胸算用』を，中下層町人への同情に基づいて書かれた作品とする上記のような把握は一面的であり，町人層全体に関心を持ち「上・中・下の階層を万遍なく描出しようとする」のがこの作品だと読み解いている[22]。

また，町人の致富成功談といわれる『日本永代蔵』も，必ずしも致富談ばかりではない。試みに同書の 30 の説話を筆者なりに，次の六つのカテゴリーに分類してみた。致富談：自分の努力や才能で財を成す話。幸運談：努力ではなく幸運に恵まれ財を成す話。不運談：本人の努力にもかかわらず不運で財を成せない話。破産談：どのようにして財を失い破産するかの話。商の姿勢：商売のあるべき姿勢についての教訓的な話。人外なる手業：人として許されない商いの仕方についての話。こ

（19） 前掲，森銑三『井原西鶴』。

（20） 井田進也『歴史とテキスト――西鶴から諭吉まで――』光芒社，2001。

（21） 暉峻康隆は『西鶴新論』（中央公論社，1981）で，『日本永代蔵』で分限者に注がれていた西鶴の視点は，「『世間胸算用』では，無産町人大衆の同情者という立場」に変わり，また『西鶴織留 本朝町人鑑』では，「分限者に注がれていた西鶴の目が，中下層町人の私生活に向けられた」と捉えている（p.220）。また，富士昭雄は『岩波セミナーブックス 49 西鶴への招待』（岩波書店，1995）所収の「晩年の西鶴の世界」で，『日本永代蔵』では西鶴は，「主として町人の致富成功談」「金銭を活用しようとする意欲的な町人」（p.274）を描いたのに対して，『世間胸算用』では「金銭に押しつぶされた悲惨な生活や，金銭に翻弄される町人大衆」（同頁）が描かれていると，テーマの変化を指摘している。

（22） 広嶋進『西鶴を楽しむ④ 大晦日を笑う『世間胸算用』』清文堂出版，2005，p.2。

のように分けてみると，たしかに致富談は多くて 9 話あり，また，教訓的ともいえる商いの姿勢も 9 話ある。しかし，その一方で，破産談が 5 話，人外なる手業の話が 2 話，努力・才能とは関係のない幸運談と不運談がそれぞれ 1 話ずつある。また致富談と幸運談を組み合わせた話，致富談と破産談を組み合わせた話，幸運談と破産談を組み合わせた話も，それぞれ 1 話ずつある。

この分類により全体を見渡してみると，『日本永代蔵』も，致富成功談の本というよりは，致富，破産，運・不運，正邪など，町人社会の諸相を描いた作品と考えられる。

こうした点から，本稿では町人物の前期と後期で視点やテーマが変わったとは考えず，むしろ前後期を通して共通する西鶴の視点を析出することとしたい。また，結論を先取りして述べるならば，好色物と町人物の間にも，当時の社会についての共通した眼差しがあるとも考えてみたい。

(3) 西鶴の時代の経済

西鶴の作品を検討する前に，既存の経済史的な研究により，背景となっている時代の経済をどのように捉えるべきかを考えておこう。

西鶴の生涯は寛永から元禄，1642 年から 1693 年。文芸での活躍は延宝から元禄で，1670 年代から亡くなるまでであった。この時期は，新儀商人と呼ばれる新しいタイプの商人が出て来る時期である。17 世紀都市の商業活動の核は問屋商人であるが，その問屋のあり方が 17 世紀の後半には変わってきたのである。

17 世紀前半の都市問屋は，基本的に領主や幕府の需要に対応したものであった。領主階級が必要とする武器，衣料，食料，調度，建材を納入する。彼らは，その調達を担うことの代価として，城下町に一定の区画を与えられ，そこで商業活動をすることを許された比較的少数の商人であった。また，この商売は，限られた仕入れ地と特定の領主需要を結びつけることを主要な営業としており，競争的あるいは革新的というよりは，領主との継続取引に支えられた門閥的なものといってもよい。

ところが，西鶴の活動した 1670 年代頃以降には，新しい生産地と，都市や他地域の新たな需要とを結びつける多くの問屋が出て来る。これが新儀商人と呼ばれた者たちである。

松本四郎は，この変化を江戸，京，大坂などの大都市において問屋機能が，荷受問屋から仕入問屋，あるいは売場問屋から専業問屋へ移って行く現象として捉えている[(23)]。この前者，荷受問屋あるいは売場問屋は，17 世紀前期以来の門閥的商人で，領主から城下の良好な場所に店地を与えられていた場合が多い。主な業務は，物品の販売を希望する生産地商人と商品の購入を望む消費地商人の間に立って仲介斡旋をし，その口銭（仲介手数料）を取ったり，商品の買手が決まるまでの倉敷料（倉庫保管料）を徴収したり，その商品の輸送手配を代行したりすることであった。産地からの商品の搬入を待つという点で荷受問屋と呼ばれ，売買仲介の場を提供するという意味で売場問屋と呼ば

---

(23) 松本四郎『西鶴と元禄時代』新日本出版社，2001。

れていた。また，特定の商品の流通に専業化せず，売手と買手の間で多種類の商品を扱っていたのも特色であった。

それに対して，仕入問屋あるいは専業問屋と呼ばれる商人は，ある特定の商品の生産・流通・消費に精通しており，優利な生産地の情報を自らつかみ，自分の元手を使い，自ら収支の予想を立てて，その生産地から仕入れ，同時に高く売れる消費地を開発してそこに売り込む営業活動を行う。自分計算で安く買って高く売るという価格差で儲ける商人である。

西鶴が生きていた17世紀後半は，荷受問屋が衰退し仕入問屋が勃興してくる交替期であった。松本は，貞享3年（1686）の江戸大伝馬町木綿商人の寄合の記録「仲間大帳」や元禄16年（1703）の大伝馬町木綿問屋衆中から同町町名主に宛てた文書などから，この変化を示している。それによると，貞享3年までは正式に問屋と称えていたのは4軒であったが，この年に新たに70軒が問屋として認められるとともに，従来の4軒は，新たな70軒と区別して，売場問屋とみなされて「売場所」などと表記されるようになったという。また，新たな70軒は，従来は仲買商などであった者が多く，仕入問屋的な性格を備えていたと推測されている。この種の問屋が流通の主導権を握ってゆくことで，問屋のドラスティックな新旧交代が進んだと松本は考えている[24]。

この例では旧問屋4軒に対して新問屋が70軒であるが，このように多数の問屋が生まれてくるのは，商機があるということである。生産地や消費地の情報に通じ，自分の才覚でこの商機を発見し生かせる能力があり，かつ資金を借り入れられれば新規の起業ができる。しかし，それは同時に経営基盤が脆弱な者が多いということにもなる。

「仲間大帳」による松本の計数では，貞享3年（1686）から宝永2年（1705）の20年間に，江戸大伝馬町の木綿問屋は総数70軒で変化がないが，その間に19軒が退転し同じく19軒が参入した。この激しい交代の様子は，経営基盤が脆弱であったということを示すとともに，成功するチャンスもあったということだと松本は考えている[25]。

このような商業活動の活発化に伴い，その中心となる都市は拡大をしていた。例えば，大坂の場合は，『大阪市史』によれば，延宝7年（1679）に町数536町であったのが，元禄13年（1700）には601町に拡大。人口は，延宝7年から元禄2年（1689）の間に20％，元禄2年から同12年（1699）の間に10％増加したという[26]。

上記のように商家の数が増え，都市も拡大する状況は，奉公人・使用人の労働市場も変化させていた。松本四郎は，宝永期（1704–1710）には奉公人給金の高騰に関する町触れが何度か出されており，奉公人が不足し売手市場であったことを推定している[27]。

（24） 同上，pp.30–33。
（25） 同上，pp.50–52。
（26） 同上，p.169。
（27） 同上，p.146。

奉公人に対する需要の増大により，従来のように地縁や血縁に基づいた身元保証のある者だけを雇用したのでは間に合わなくもなっていた。その点で，松本は，元禄 13 年・15 年（1700・1702）の江戸南伝馬町町々名主の記録「日記言上之控」の記事などから，金銭でつながる請人（身元保証引受人）や「出居衆」の存在を指摘している[28]。「出居衆」とは，店借をしている住民の名目的な同居人となり，その住所を居所として仕事を探し奉公に出ている者のことである。

このような，問屋の交替，商業の活発化，新たな労働市場の形成などの都市における変化をもたらした大本の原動力は，17 世紀後半を通して，農業生産力とりわけ商業的な農業が発展したことである。

この点を考える上で参考となるものとして，中井信彦による信州松本の中馬荷受問屋茶屋についての研究がある[29]。中井は，この問屋の貞享 3 年（1686）2 月中旬から 12 月初旬までの大福帳を分析し，取引状況を明らかにしている。それによれば，この間の茶屋の取扱い商品量はメインの茶とタバコだけでも，茶の入荷 1600 駄，タバコの出荷 1500 駄にのぼり，その他にも，干柿，繰綿・木綿，穀類，紙などきわめて多種類の商品をあつかっていた。取引相手は 80 町村 317 名にのぼり，彼らの居住地は北は北信濃，南は三河，遠江，南東は甲州にまで及ぶ広い範囲にわたっていた。その大多数は農民あるいは農村商人で，自分の手馬に荷を乗せて運ぶ「中馬」とよばれる運送が目立つのも特徴だった。しかも，彼らは駄賃稼ぎだけではなく自分計算で取引を行う荷主である場合も多かった。茶屋を中心としたこうした取引の背景には農村の商品的農業生産が遠隔地向けの特産品的性格を帯びてくる状況があり，茶屋はそうした流通の結節点として，年商 5000 両と概算されるような取引をしていたのである。この大福帳より 8 年後の元禄 7 年，松本城下の別の問屋は，このような流通とその結節点となる「荷物問屋」の存在が，城下松本の近年における繁栄の源となっているという見解を記しているという[30]。

しかも，このような生産と流通は，全国規模で結びつけられて展開しつつあった。中井は別の論文で，入浜塩田の開発による瀬戸内海十州塩業の発展，それに伴う九十九里浜における製塩業から大地引網鰯漁業と干鰯生産への転換，この干鰯に支えられた畿内農村の棉作の発展や稲作における金肥使用の開始を関連させている[31]。この例のように，中井は，17 世紀末から 18 世紀初頭は，「各地の生産が，隔地間の分業に結び合わされることによって相互に関連をもち合いながら，特産地を形成しつつあった」と考えている[32]。

（28） 同上，p.148, pp.150–151。

（29） 中井信彦「元禄期の都市商業と農村商人――貞享三年松本荷問屋の大福帳から――」（伊東多三郎編『国民生活史研究 2 生活と経済』吉川弘文館，1959）所収。また，その内容の概略は，中井信彦『町人』小学館，1975，pp.215–218 に要約されている。

（30） 同上，中井信彦『町人』pp.213–215。

（31） 中井信彦「近世都市の発展」（『岩波講座日本歴史 11 近世 3』岩波書店，1963，所収）pp.50–52。

（32） 同上，p.52。

以上に概観したように，西鶴の時代には，農村における商品的農業生産が発展し，その中から新たな特産地が出現してきていた。同時に，都市と農村の間には，それらの生産と消費を結びつける流通の形成が進んだ。全国規模で，新たな特産地を有機的に関連させる経済活動も展開をし始めていた。それらの変化は，大坂や江戸のような大都市における商業の活発化と経営形態の新旧交代を引き起こすとともに，都市の拡大や奉公人需要の増大をもたらしていたのである。これをマクロ的に見れば，西鶴の時代は経済の成長期であったといってよい。

このような変化が鈍化するのは，西鶴以降の時代である。具体的な切っ掛けは，正徳改鋳に伴う不況だといわれている。元禄 8 年（1695）以来，貨幣の増鋳政策を進めていた幕府は正徳 4 年（1714）年に貨幣数量を縮減する政策に転じるが，特に享保 6 年（1721）の「旧貨通用停止令」が決定的であった[(33)]。この令により幕府が，慶長以来の諸種の貨幣の流通を禁じ正徳以降の新貨幣にのみ通用を認めたことで，貨幣流通量は一気に約三分の二に激減したのである[(34)]。これにより金融が閉塞し売掛金，買掛金の焦付き・不払いなどのトラブルが頻発するようになった。荻生徂徠がいう「世界の困窮[(35)]」という不況状況である。

このようなトラブル多発の中で，商人による仲間組織の形成が進んだ。負債を負った場合の共済金の積立て，取引法の統一，奉公人や徒弟の移動の規制，競争の抑制などのためであった。また，従来は商人が仲間で結束することを警戒していた幕府も政策を転換し，享保 9 年（1724）には，江戸の問屋に組合の結成を命じた。中井は，このようにして，それまでの自由な状況とは異なる，商業組織の体制化が進んだと考えている[(36)]。

3. 西鶴の見る同時代経済

(1) 経済状況

西鶴は多くの作品で，「商い事」がないと不況感を口にする人々がいることを伝えている。しかし，西鶴自身は「諸商売多し」という判断を示していた。この点を読み誤ってはいけない。

例えば，『日本永代蔵』（以下『永代蔵』）には，「万の商事がないとて，我人年々（とし）くやむ事，およそ四十五年なり。世のつまりたるといふうちに，丸裸にて取付，歴々に仕出しける人あまた有」（巻六の五[(37)]）とある。人々の「商事がない」という苦情にもかかわらず，元手なしで成功している者が多数いると見ていたのである。

（33） 同上，pp.93–95。

（34） 流通貨幣数量実数の動向については，岩橋勝「徳川時代の貨幣数量」（梅村又次他編『数量経済史論集 1 日本経済の発展：近世から近代へ』日本経済新聞社，1976，所収）。

（35） 平石直昭校注，荻生徂徠『政談 服部本』東洋文庫 811，平凡社，2011, p.141。

（36） 前掲，中井信彦「近世都市の発展」pp.95–100。

不況下における庶民の大晦日の様子を描いた作品としばしばいわれる『世間胸算用』（以下『胸算用』）でも，「商い事がない」という年来の人々の苦情にもかかわらず，実は好況であることを次のように表現している。

「商（アキナ）ひ事がないないといふは六十年此かた，何が売あまりて捨（す）たる物なし。ひとつ求れば其身一代，子孫まで譲り伝へる挽臼（ひきうす）さへ，日々年年に御影山も切りつくすべし」（巻一の三）(38)

この時代には，およそ売れ余る物がない。何代にも亘って使う挽臼さえ，原料石の産地である御影山も切り崩すほど売れているという。あるいは，不況感は見方が悪いのであり，三十年来の繁昌は明らかだと，次のようにも述べている。

「世になきものは銀（かね）といふは，よき所を見ぬゆへなり。世にあるものは銀なり。其子細は，諸国ともに三十年此かた，世界のはんじやう目に見えてしれたり」（『胸算用』巻五の一）

このような見方は，最晩年の『西鶴織留』（以下『織留』）でも，次のように変わっていない。

「今の世に商ひ事なきと，人毎にいへり。是は大きに算用違ひ，むかしとは各別，諸商売多し。其ためしには，大坂の堺筋に，椀・折敷・重箱よろづぬり物屋ありしが，親の代，寛永年中の古帳出して見るに，壱年の売物七貫にたらず」（巻一の三）(39)

この塗物屋の場合は，四五十年以前の寛永年間の売上げが七貫であったのに対して，現在は四十貫であることを，この引用につづけて述べている。そのように商売の規模は大きくなっているというのが西鶴の判断であった。

そうだとすると，当時の人々の中に，なぜ「商ひ事がない」「世のつまりたる」「世になきものは銀（かね）」「今の世に商ひ事なき」というような不況感を語る者がいたのだろうか。その点で，考えてみなければいけないのは，そのような不況感が語られているのは，「およそ四十五年」（『永代蔵』）あるいは「六十年此かた」（『胸算用』）だということである。両書の執筆年から逆算すると始期に 10 年余りのズレはあるが，大まかにいって，17 世紀の半ば以降が「商い事がない」と悔やまれる時代であったということになる。この言葉どおりに，その時代を全般的な不況の時代であったと考えると経済史的な事実と合わない。

---

(37) 野間光辰校注『日本古典文学大系 48　西鶴集 下』岩波書店，1960。以下『日本永代蔵』は，『日本古典文学大系』版による。なお，西鶴の原文テキストには多くの平仮名ルビが付されているが，本稿では読みにくい漢字のルビのみのこした。また原文にルビはないが読みにくい漢字にはカタカナでルビを加えた。

(38) 前掲，野間光辰校注『日本古典文学大系 48　西鶴集 下』。以下『世間胸算用』は『日本古典文学大系』版による。

(39) 同上。以下『西鶴織留』は『日本古典文学大系』版による。

それでは何故，そのような苦情を述べる者がいたのだろうか。その点は，前節で述べた新旧商売，新旧問屋の交替に結びつけて考えるべきだろう。旧商売の担い手の側からいえば，「四十五年」以前あるいは「六十年」以前までは商売がしやすかったが，17 世紀後半には経営が難しくなったはずである。その感覚を西鶴は記しているのである。例えば，京都であれば，「むかしの長者絶れば，新長者の見えわたり，はんじやうは次第まさりなり」（『永代蔵』巻六の五）というように，経済は成長しているが，その中で「むかしの長者」は没落し，「新長者」がそれに代わって出てきていた。

ちなみに，西鶴の生家と推測される江戸買物問屋の日野屋庄左衛門の業態は，江戸からの注文に応じて多種多様な商品を調達出荷する大坂の仲介的問屋業で，自分勘定で市場を切り開いてゆく新タイプの問屋ではないと考えられている。延宝年間（1673–1681）の大坂の買物案内記『難波すゞめ』や『難波鶴』によれば，日野屋はその中でも 17 軒の元組の 1 軒で，それらとは別に 13 軒の新組と見られる問屋が記載されているという[(40)]。そのような点で，西鶴が旧タイプ問屋商人の抱いていた感覚に通じていたことは十分に想像できる。ただ，そうした旧商人の経済観も作品に登場させてはいるが，西鶴自身の景況感は，時代は右肩上がりだというものであった。

しかし，新たな産地や消費者が生まれてマクロでは経済が拡大していたとしても，そこでの商売が，かつてに較べて容易なものであったわけではない。領主の物品を扱い，また領主階級を顧客とするような限られた門閥商人は競争の激しい世界に生きていたわけではなく，取引も丼勘定で大きく儲けられたであろう。

それに対して 17 世紀後半に展開してきた商業の世界には，たしかに新たな商売のチャンスはあったのだろう。大津のような物流の要地では「何をしたればとて売（うれ）まじき事にあらず」（『永代蔵』巻二の二）という可能性があった。

しかし，そのことは，西鶴が見る所では，商売が楽であったことを意味するものではない。商売の世界に生きている者たちは，かつてより賢い人々であり，個々の商人はその中で生き残ってゆかなければならなかった。その同時代を『永代蔵』では，「世けんかしこき時代」と呼んでいる。例えば，人々は何とか元手を得たいものと神仏に願いを掛けるが，「世けんかしこき時代になりて，此事かなひがたし」（『永代蔵』巻四の一）という。「世けんかしこき時代」という見方は，晩年の作品でも「近年人のありさまを見るに，いづれか愚かなるはひとりもなし」（『織留』巻三の一）というように，変わることはない。また，そのような賢き人々と競って商売をしてゆくことの厳しさを，次のように書いている。「昔と替り人皆せちかしこくなつて，今程銀のもうけにくひ事はなし」（『西鶴置土産』〈以下『置土産』〉巻四の一[(41)]）。「近年は人の心さかしうなつて，大かたのはたらきにては，中々見過に成難し」（『織留』巻三の四）。

（40） 前掲『西鶴と元禄時代』pp.20–25。

（41） 新編西鶴全集編集委員会編『新編西鶴全集』（第 4 巻・本文篇，勉誠出版，2004）所収『西鶴置土産』元禄 6 年（1693）。以下『西鶴置土産』は『新編西鶴全集』版による。

かつての商人は見方によっては，門閥的な特権の上でおっとりと，「世のせわしからぬ時を得て」（『置土産』巻三の三[42]）生きることができた。しかし，その旧商人の時代は終わり，世智賢い新たな商人たちが出て来た。彼らは心さかしき人々で，その相互の競争の中で，金銀をもうけることは簡単なことではなかった。早い時期の作品から一貫して西鶴が，「今，此金銀もふけにくい世の中」（『本朝二十不孝』〈以下『二十不孝』〉巻三の二[43]），「今時はまふけにくひ銀（かね）」（『永代蔵』巻一の二）というようなことを述べているのは，このような意味においてでもある。

時代は，経済的に繁栄しているが，それは厳しい競争の上に咲いていた華なのである。「人の内證をみるに，其家それぞれに，諸道具を次第にこしらへ，むかしよりは，おしなべて物ごと十分になりぬ。尤，家をやぶる人もあれど，家とゝのへる人まされり」（『永代蔵』巻六の五）とあるように時代は豊かになって来ているが，それは破産と致富，敗者と勝者を産みながらの成長であった。西鶴は，同時代の経済をそのように見ていたのである。

(2) 新儀商人について

このような経済状況に対して西鶴自身の評価は，実は後に述べるように単純なものではない。しかし，その中で，前向きに商売に取り組むということを否定はしていない。『永代蔵』では，同時代の商売について，「物ごと手広くなりぬ。以前にかはり，世間に金銀おほくなつて，もうけもつよし，そんも有。商（アキナヒ）のおもしろきは，今なり」（巻六の四）と記している。全体として成長しつつも，個々には儲ける者と損をする者を生み出す経済。だからこそ「商のおもしろきは，今なり」なのである。西鶴は，17 世紀後半の町人社会のさまざまな面を描いているが，その対象の一つは，この「商のおもしろきは，今」という時代の中で，新たに勃興してきた新儀商人である。

西鶴は，これらの商人をどのような者たちと見ていたか。第一に，彼らは，「近代の出来商人，三十年此かたの仕出しなり」（『永代蔵』巻六の五）というように，過去三十年ぐらい間に登場して来た「出来商人」である。『永代蔵』の著作年から逆算すれば，明暦・万治年間（1655–1660）頃から出て来た商人だろう。第二には，前項の最初に引用したように，「丸裸にて取付，歴々に仕出しける人」（同，巻六の五）であった。徒手空拳から始めて財を成した商人である。

第三には彼らは，元来の町人ではなく，次のように農村出身の者たちであった。

---

(42) この箇所では，奈良東大寺門前に大きな店を構えて酒屋への金融を業としていた大尽に関して，「世のせわしからぬ時を得て」いたと書いている。『決定版対訳西鶴全集 15　西鶴置土産・萬の文反故』の注記では，その時代を寛文年間（1661–1672）頃と推定し，その後の延宝（1673–1680）から元禄（1688–1703）にかけてが不景気となったので，それに比較して寛文期を「世のせわしからぬ時」と表現したと解釈している。しかし，長期的な趨勢として延宝－元禄を不景気と解するのは正しくない。「世のせわしからぬ時」というのは，むしろ競争的市場社会が始まる前と考えた方がよいだろう。

(43) 新編西鶴全集編集委員会編『新編西鶴全集』（第 2 巻・本文篇，勉誠出版，2002）所収『本朝二十不孝』貞享 4 年（1687）。以下『本朝二十不孝』は『新編西鶴全集』版による。

「昔，こゝかしこののわたりにて纔（わづか）なる人なども，その時にあふて旦那様とよばれて，置頭巾（おきづきん）・鐘木杖（しゅもくづへ），替草履（かへ）取るも，是皆，大和・河内・津の国・和泉近在の，物つくりせし人の子共」（同，巻一の三）

「物つくりせし人の子共」とは農民の子ということである。大和・河内・摂津・和泉の農民の子が，丁稚奉公などで大坂へ出て来て，その後，小商売を営む「纔なる人」から始めて財を成し，置頭巾（おきづきん）をかぶり鐘木杖（しゅもくづへ）をつき替草履（かへ）を使用人に持たせて歩くような金持ちになったと見ているのである。しかも，「惣じて大坂の手前よろしき人，代ゝつゞきしにはあらず。大かたは吉蔵（きちぞう）・三助がなりあがり」（同上）[44]というように，それが大坂の金持ちの「惣じて」の特徴であり一般的な出自だと西鶴は考えていた。

第 2 節で，17 世紀後半の都市商業は，農村における商業的農業の拡大を背景として，そこで生産される商品の新たな流通を担うことで発展したことを述べた。西鶴のいう農村出身の成功者は，産地に通じており，このような流通を開拓したのではないかと想像されるが，実は作品中には，明確にそのような町人の成功譚はほとんどない。敢えて例を挙げるとすれば，近江八幡の扇子屋の話ぐらいだろうか。この扇子屋は，小さな小売り酒屋から始め，周辺で生産される麻布や畳表の商売に進出し，それを京・大坂に出店を出して売り，さらに蚊帳の生産販売も行い大商人となる（『織留』巻一の四）。扇子屋が農村出身とは述べられていないが，八幡周辺の商業的農業生産物を扱って成長してゆく姿は，経済史的な背景と一致している。

しかし，村と町を結ぶこのような流通で町人が成功する話は，作品中ではむしろ特例である。とはいうものの，西鶴の目が農村から始まる新たな生産と流通に向いていなかったというわけではない。

『胸算用』最終話では，年末の江戸に集まる膨大な商品が印象深く書かれている。数万駄の里馬に運ばれてきた大根や，紅葉の山を思わせる多量の唐辛子，雪山と見まごうばかりのつみ綿の連なりなど，農村からの山をなす流入品が，江戸の繁栄の象徴として描写されている。

また，町人ではないが農村商人として都市向けの新たな生産と流通を組織し財を成した者の話はある。例えば，豊後で荒地を使って生産した菜種を上方に出荷し西国にならびなき長者となった萬屋（『永代蔵』巻三の二）の話，あるいは，小百姓から勤勉と工夫で次第に富を得て，さらに唐弓を模倣導入し打綿の効率を上げ，大和を代表する綿商人になった九助の話（同，巻五の三）などは，農村商人としての成功譚である。

このように西鶴は，農村から起こる新たな経済の動きや，町と村を結ぶ商売の展開は十分に認識していたと考えられる。そのような動きや展開の上に，江戸，大坂，京などをはじめとする都市の

（44）「吉蔵・三助」は奉公人の名前の象徴として出している。この文章に続いて，彼らが，金持ちになると以前の言葉のなまりがなくなると書かれていることから，彼らが農村の出身であることが暗に示されている。

成長と繁栄があった。ただし，西鶴が取り上げる町人の多くは，農村と都市の間の流通そのものを担っていた者ではない。新たな流通を基礎とした繁栄の中で，都市にはさまざまな商機も生じていたのだろう。そのことを西鶴は，「諸国の城下，又は入舟の湊などは，人の足手かげにて，さまゝへすぎわひの種もあるぞかし」（『織留』巻三の四）と書いている[45]。都市と農村の流通に限らず，そのような「さまゝへなすぎわひの種」を見いだして，それに「丸裸」で，しかも自分勘定で挑戦した新儀商人たち全てに，西鶴は強い関心を持ち，彼らの成功と破綻を描こうとしていたといえよう。

4. 新儀商人の経済倫理

その新儀商人の経済倫理を西鶴はどのようなものとしているのだろうか。それらはさまざまな表現で述べられているが，「金銀」，「才覚」，「油断なく」，「正直」という四点にまとめてみよう。

(1) 金銀

富の獲得に向けての人間のエネルギーを賞賛する文言は，西鶴の町人物の随所に見られる。『永代蔵』の巻一冒頭では，金銀を両親につぐ「命の親」だとして，次のように述べている。

> 「一生一大事，身を過ぐるの業（わざ），士農工商の外，出家・神職にかぎらず，始末大明神の御託宣にまかせ，金銀を溜べし。是，二親の外に命の親なり」（巻一の一）

あるいは，次のように町人にとっては金銀こそが「氏系図」だともいう。

> 「常の町人，金銀の有徳ゆへ世上に名をしらるゝ事，是を思へば，若き時よりかせぎて，分限の其名を世に残さぬは口おし。俗姓（ぞくしやう）・筋目にもかまはず，只金銀が町人の氏系図になるぞかし」（巻六の五）

それほど大事な金銀である。したがって，「金銀なくては世にすめる甲斐なき事は，今更いふまでもなし」（『織留』巻一の三）とも考えていた。

この金銀への強い希求は，第一には，金があれば何でもできるということから来る。「地獄極楽の道も銭ぞかし」（『二十不孝』巻二の四），「銀さへあれば何事もなる事ぞかし」（『永代蔵』巻三の一），「何國（いづく）に居ても，金銀さへもちければ，自由のならぬといふ事なし」（『胸算用』巻五の一）などと，金銀による自由は繰り返し述べられている。これらの言葉からは，深読みをすれば，身分制社会の中で身分とは異なる別の力を主張する反骨さえ感じられる。

---

(45) 西鶴は，都市での集住が互いに仕事を生むと考え，それを「千軒あれば友過といへる」（『二十不孝』巻一の一），「千軒あれば友過ぞかし」（『織留』巻三の四）と述べている。

第二には，金銀の蓄積，致富は，老後の快楽のためである。町人のあるべき人生は，「二十五の若盛より油断なく，三十五の男盛りにかせぎ，五十の分別ざかりに家を納め，惣領に万事をわたし，六十の前年より楽隠居」（『胸算用』巻二の一）とあるように老後の楽隠居であり，老後には「其身は楽（たのしみ）を極め，わかひ時の辛労を取かへしぬ」（『永代蔵』巻四の一）という生活をすることだった(46)。ここには，たしかに，M. ヴェーバーの論じたプロテスタンティズム(47)の生涯続く禁欲はない。

かといって，仏教などの宗教に頼った後生頼みがあるわけでもない。財を成したある町人は死に際して，西方極楽への往生を勧める息子たちに，自分は「浮世の帳面さらりと消て，閻魔（えんま）の筆に付かゆるに胸算用を極めければ，何をか思ひ残す事なし」と自分の人生への満足と地獄行きの覚悟を示し，「汝等過賄（すぎはひ）の種を忘れな」と商売の継続を命じて亡くなる（『永代蔵』巻三の二）。あるいは，仏道を信じ致富への気力を失った生き方に対しては，「此心底からは，富貴になるべき子細なし。福徳祈る商人（あきんど）の家に，世の無常を観じ，人のなげきにかまふ事なかれ」（『織留』巻二の五）と，批判する。

来世信仰に挑戦するかのような富へのこの専心は，一見したところ，M. ヴェーバーが前近代における金銭欲を象徴するものとして述べた「利益のためには地獄へも船を乗り入れ」た「オランダ人の船長」の物語(48)を思い起こさせる。しかし，詳しくは後述するが，西鶴の金銭観・致富観は，それほど単純ではない。実は，一定の禁欲倫理や社会性と組み合わされて富への専心が考えられている。

その例として，ここでは，致富の社会性のみ紹介しておこう。致富の意味は，上述のように財力による自由や老後の安楽という個人の快楽のためでもあるが，同時に，多くの人々に生活の場や糧を与えることにも求められていた。前節で紹介した近江八幡の扇子屋は，蚊帳の製造販売で成功し，数百人の使用人に手厚い扶持仕着を与えていた。このことを，「一人のはたらきにして数百人をはごくむ事，大かたならぬ慈悲ぞかし」（『織留』巻一の四）と，「慈悲」という言葉で雇用の創出を賞賛していた(49)。あるいは，財を成した老後に金銀を使って楽しみ暮らすことは，世に金銀を還元して需要を喚起する「ほどこし」であり，意味あることと考えられていた。そのことを西鶴は，「人，若時（わかい）貯（たくはへ）して，年寄ての施（ほどこし）肝要也」（『永代蔵』巻三の一）と述べている(50)。また，富を目指す経済活動は，角倉了以が運河として開鑿した高瀬川が，「洛中のたすけと成り，竈（かまど）の煙にぎはへり」（『織留』巻二の一）という繁栄を社会にもたらしたように，個人の利得だけに止まるものではなかった(51)。致富

（46）『永代蔵』巻四の一に，蘇芳木による染色を工夫して財を成した商人の話が出て来るが，その商人の老後について，「此人，数多の手代を置て諸事さばかせ，其身は楽（たのしみ）を極め，わかひ時の辛労を取かへしぬ。是ぞ人間の身のもちようなり。たとへば万貫目持たればとて，老後迄其身をつかひ，気をこらして世を渡る人，一生は夢の世とはしらず。何か益あらじ」と述べている。また，極めて贅沢な芝居見物をする富商の有様を描写した段では，「此人大名の子にもあらず，只金銀にてかく成事なれば，何に付ても銀もうけして，心任せの慰みすべし」（『胸算用』巻三の一）と，致富後の贅沢を肯定している。

（47）マックス・ウェーバー著，梶山力・大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店，1955。

（48）同上，上巻，p.53。

は，個人の快楽を越えて，社会的に意義のあるものであり，またそのような致富が望ましいことと考えられていた。この点も銘記しておくべきだろう。

(2) 才覚

西鶴は才覚ということに強く惹かれていたようであり，町人物のどの作品でも，この語はもっとも頻出する語の一つである。才覚とは，経営の才能であり，人の気づかぬ営利機会を生かす能力であるが，特に，無一文かあるいはわずかな小商売から工夫をして財を成してゆく能力を指している場合が多い。

この種の才覚を賞賛した話は多いが(52)，例えば，『永代蔵』巻二「才覚を笠に着る大黒」の主人公で

---

(49) この他にも，例えば，「壱人のはたらきにて大勢をすごすは，町人にても大かたならぬ出世，其身の発明なる徳なり」（『永代蔵』巻六の五）も，同様な考え方である。また，「町人の出世は，下々を取合（とりあはせ），其家をあまたに仕分（わく）るこそ，親方の道なれ」（『永代蔵』巻四の一）とあるように，暖簾分けをして使用人を独立させてやることも致富の意義であった。大きな商家の主人として多くの使用人に生活を与える能力があるということは，「其身ばかりの世のわたりにはあらず。壱人の心ざしを以て，家内の外何人か身をすぐるよろこび，是にましたるぜんごんなし」（『織留』巻六の四）というように，喜びであり善根であった。

(50) 丸山真男は前掲『日本政治思想史研究』において，江戸時代町人の精神に関して，若い時の禁欲的生活も「結局後の快楽的消費のため」であったとして，「年寄ての施肝要也」という西鶴のこの言葉を引用し，その精神を，M. ヴェーバーが意味するような「資本主義の精神からは遠く離れてゐた」と極めて否定的に捉えている（同書，pp.126–127）。しかし，この見方は「施肝要」という言葉の意味を適正に捉えておらず，M. ヴェーバーが提示した前近代商人の類型に余りにも引きずられた解釈といわざるを得ない。

(51) この他にも，紀州大湊で捕鯨で財を成した天狗源内は，鯨の捨骨から油を取ることを思いついて分限となったが，それは「すゑ〳〵の人のため，大分の事なる」と考えながらの思いつきであった（『永代蔵』巻二の四）。また，すでに述べた菜種生産で財を成した豊後の萬屋には，荒蕪地を放置しておくことは「狼の臥所（ふしど）にするも国土の費」という思いがあった（同，巻三の二）。

(52) ここに例として述べる新六の話以外にも，「才覚」で分限となった商人として，以下のような話がある。「纔（わづか）なる人宿（やど）」であったが「其身才覚にて」広く名を知られる商人になった酒田の鐙屋（『永代蔵』巻二の五）。金平糖の製法を工夫し，「なを才覚の花をかざり」千貫目持となった長崎の小商人（同，巻五の一）。すでに紹介した話だが，零細な酒と米の小売商から，「内儀才覚にて」貧者へのサービスを続けて評判を上げ，致富へのきっかけを掴んだ近江蚊帳の扇子屋（『織留』巻一の四）。親からもらったわずか銭二文を元手に，「我と才覚して」富貴になった京都の山崎屋（同，巻二の一）。「才覚にて」自店の目薬が売れているという評判を広め，分限となった大坂備後町の目薬屋（同，巻四の二）。

また，「才覚」という表現は使われてないが，自分の工夫のみで財を成した商人の話としては，他にも以下のようなものがある。大坂北浜で筒落米を掃き集めて売ることで金を貯め銭両替となる老婆（『永代蔵』巻一の三）。江戸で大工が捨て落としてゆく木の切れ端を拾って売ることから富を得てやがて大材木商となる箸屋甚兵衛（同，巻三の一）。註 46 でも言及したが，元は京の貧しい染物屋だが，本紅と変わらない色となる蘇芳木の染めを工夫し，それを担いで江戸との間の鋸商いを続けて財を成す京の桔梗屋（同，巻四の一）。大坂で奈良草履屋としての商売に行き詰まり村に引き籠るが，そこで茄子の木と犬蓼の燃えさしから懐炉を考案して財を成し，江戸で両替商となった男（『織留』巻一の二）。

ある京の富商の息子新六の話などは，その典型だろう。新六は，放蕩を重ね家の金を使い込み，そのため丸裸無一文で勘当され江戸に向かうが，たまたま黒犬が死んだ所に出会い，それを貰い受け黒焼きにし「疳の妙薬」になる「狼の黒焼」として売りながら路銀を作り江戸に辿りつく。江戸で共に夜を明かした乞食仲間から，江戸は忙しい所なので，消費しやすく小口に加工したものが売れるという話を聞き，それをヒントに，木綿を反物で買って切り分けて手拭いを作り，縁日に天神の手水鉢の横で参詣人に売ることを続けて，十年足らずで五千両の分限者となる。晩年は，所の指導的な町人として「所の人の宝」「一人の才覚者」といわれるような存在になったという話である。

この種の成功は，誰にでもできることではなかっただろうが，かといって当時の成長する経済の中で，全く不可能なものとも考えられてはいなかった。可能性があるのだとすれば，それを実現する才覚を発揮できないことは，「口おしき事」でもあったのである。『胸算用』では，江戸の繁栄の描写に続けて，「世界は金銀たくさんなるものなるに，これをもうくる才覚のならぬは，諸商人に生れて口おしき事ぞかし」（巻五の四）と，その商人観を述べている。

このような才覚とは異なり，親から譲り受けた財産で「あたら世をうか〳〵とおくり」，自ら稼ぐこともなく，ぜいたくに暮らすのは，「世上かまはず潜上男」「天命をしらず」と見なされ（『永代蔵』巻四の一），軽蔑すべき存在であった。嫁の持参金を当てにして商売をすることも，同様に自力ではないという点で，恥ずべきことであり，「娌（よめ）の敷銀（しきぎん）を望み，商の手だてにする事，心根の耻（はづか）しき」（『永代蔵』巻一の五）と評されている。

親から引き継いだ財産や金持ちの後家と結婚して豊かに暮らすことは，博奕業（ばくちわざ）や偽物商（にせものあきない）などと同様に，「常にて分限になる」ことではなく，邪道であり，商人としてのフェアプレーではなかった。そのような富に頼らず「常にて分限になる人こそまこと」と考えられていたのである（『永代蔵』巻六の四）。しかし同時に，当たり前のことを行っていたのでは財は成せない。家産を大きく成長させた大坂通町の銭店の養子のように，「外の人のせぬ事」すなわち新たな事業に挑戦してゆかなければならない。その意味では，「常のはたらきにて長者には成がたし」というのも西鶴の経営観であった（『永代蔵』巻六の二）。フェアプレーという意味では「常にて」富を目指すべきであり，「外の人のせぬ事」という点では「常のはたらき」を越えた商いでなければならない。西鶴にとっては，この常であり非常であるところが町人の才覚であった。

(3) 油断なく

商人の心構えについて，「朝暮油断なく」（『永代蔵』巻三の一）とか「暫時も油断する事なかれ」（『永代蔵』巻四の一）といった警句は，西鶴の町人物に頻出する。この言葉は，自らの生業に関して常に緊張感を持って用心深く，手堅く経営することを指しており，とりわけ「堅固」，「家業」・「家職」，「算用」・「十露盤（そろばん）」・「勘定」，勤勉，「始末」などは油断なく努めなければならない箇条であった。

「堅固」は，多くは健康であることを意味する言葉として使われているが，前後の関係から人柄や

商いが堅実という意味が含まれている場合もあるようだ。いずれにしても，「福徳は其身の堅固に有，朝夕油断する事なかれ」（『永代蔵』巻一の一）というように，「堅固」であることを油断なく維持しなければならない。

「家業」・「家職」は，自家あるいは自分が携わっている業種のことであり，他の商売に夢を抱いて移り気を起こさず，「家業」・「家職」へ励むべきことが説かれている。「手遠きねがひを捨て近道に，それ〴〵の家職をはげむべし」（『永代蔵』巻一の一）というのが，その教訓である。その「家業」・「家職」は，親の代から引き継いだものの場合もある。その場合も「一筋に家業かせぐ」ことが分限になる道であり，「惣じて親より仕つゞきたる家職の外に，商売を替て仕つゞきたるは稀也」と見られていた（『胸算用』巻五の二[53]）。しかも，慣れた家業だからといって，気を抜いてはいけない。「それ〴〵の家業油断する事なかれ」（『永代蔵』巻六の二）というように，家業に緊張感を持って専心することが必要だと考えられていた。

親からの家業を大切にするのは守りの姿勢であり，「才覚」の賞賛と矛盾するようにも思われる。しかし，西鶴の作品は，攻めの「才覚」と守りの「家業」「家職」の両面を肯定的に描いている。これらはどちらも，この時代の商人のあるべき姿であり，両者の違いは，それぞれが置かれた状況の違いから来るものであった。

「算用」・「十露盤」・「勘定」という言葉で徳目とされるのは，帳簿をつけ常に収支を計算して経営の実態を正確に把握していることである。当時の一定規模以上の商売は，掛売り，掛買いや仲介売買での口銭取りが一般的であり，現金残高は収支の実態を表してないのが普通であった。そのような状況では，「只朝夕（てうせき）のもてあそびには，十露盤（そろばん）置て見て，節季〳〵請払ひ大事にすべし」（『織留』巻五の一）とあるように，暇さえあれば十露盤を置いて「請払ひ」の計算をしておくことが重要であった。正確な経理を抜きに商いの存続は不可能であり，「帳面そこ〳〵にして算用こまかにせぬ人，身を過るといふ事ひとりもなし」（同，巻五の一）と西鶴は書いている。とりわけ，第２節で見た松本の茶屋のように，膨大な小口取引を集積するような新たな経営では，帳簿と計算は不可欠であったに違いない。「公家は敷嶋の道，武士は弓馬。町人は算用こまかに，針口の違はぬやうに，手まめに，当座帳付べし」（『永代蔵』巻五の四）という一文は，帳簿・計算こそが，町人身分の最も基本の能力であるとの考えを示している。しかも，気を緩めればたちどころに富は失われる。だからこそ，「金銀は，もふけがたくてへりやすし。朝夕十露盤（そろばん）に油断する事なかれ」（『永代蔵』巻六の一）とあるように，油断なく計算を続け，常に収支を把握することが必要であった。

勤勉は，西鶴に限らず，江戸時代の多くの著作で勧められている常識的な徳目である。西鶴の作品でも色々な表現で言及はされるものの，いうまでもないことであったためか，他の徳目とは別個

（53）『織留』巻六の四でも，親から譲られた仕事を捨てて見場のよい仕事に移って家を潰すことが戒められ，「腹の中よりそれにそなはりし家業を，おろかにせまじき事」が説かれている。

に，それのみで特に取り上げられている箇所は意外と少ない。しかも，勤勉が，致富に意味あるものとして特に強調されているのが，農民についての話であり，その点は興味深い。一つの例は，すでに言及した小百姓から大和を代表する綿商人になった男の話である。この男が百姓として豊かになっていったのは，「朝暮油断なく，鋤鍬の禿程，はたらくが故」（『永代蔵』巻五の三）であったとしている。もう一つの例は，常陸の「日暮の何某」という豪農の話であり，この男は貧しい農民であったが，「朝は酢・醤油を売り，昼は塩籠を荷ひ，夕ぐれは油の桶に替り，夜は沓を作りて馬かたに商ひ，若き時より一刻も徒居せず」（同，巻五の四），勤勉に農間余業に専念することで次第に金を蓄えた。

このような言及の仕方を見ると，西鶴が勤勉を，町人の徳目としては他の徳目ほどには重視をしていなかった可能性は考えられる。ただし，それだからといって，西鶴が町人にとって勤勉を無用としていたわけではない。「身過は八百八品，それ〴〵にそなはりし家職に油断する事なかれ。今時は，正直をもつて其身の骨をくだけば，天理に叶ひ，それ〴〵の渡世いたさぬといふ事なし」（傍点引用者，以下同。『織留』巻三の四）とあるように，其身の骨を砕くような勤勉は，家職や正直とともに，町人の場合にも，一つの徳目と考えられていたことは間違いない。

「始末」とは倹約のことである。倹約も江戸時代の経済倫理として士庶を問わず重視されたものである。倹約というと守りの姿勢と結びつけられることが多いが，西鶴の場合には攻めのため，すなわち致富のための「始末」が描かれている点が目を引く。例えば，次の一文は，親からの金銀に頼らず，自ら財を成すための倹約であり，攻めの姿勢といえるだろう。

> 「親の譲りの金銀にて身を過けるは，武士の位牌知行取て暮すに同じ。されば，人出生してより毎日銭壱文づゝ溜て，百より一割の利を掛て，六十歳の時は六拾貫目になりぬ。是をおもへば，万事に始末をすべし」（『織留』巻二の一(54)）

他方で，もちろん，西鶴は守りのためにも「始末」が重要だとも考えていた。作品の中には倹約を忘れ産を失う話はさまざまにある。例えば，江戸のある乞食は，「親から江戸の地生にて，通り町に大屋敷を持て，一年に六百両づゝ，さだまつての棚賃を取ながら，始末の二字をわきまへなく，其家迄売はたし」，物もらいとなっていた（『永代蔵』巻二の三）。

ただし，「始末」ができないことは，時代状況のなせる業でもあった。当時は，以前と違って，「人の風俗次第奢になつて」おり，とりわけ女性の衣類が贅沢となっていた。そのため，「女の身持，娘

---

(54) この文と同様に日々僅かな倹約を積んでまとまった富と成す計算は，『胸算用』巻五の一により詳しく出ている。この場合には，たばこを日に 1 文ずつ倹約すると 10 年で 3 貫 600 文となり，同様に倹約すれば，「茶・焼木・味噌・塩，万事に何ほどの貧家にても，一年に三十六匁の違ひ」があり，10 年で 360 目となると計算。これを利息をとってまわせば，30 年で銀 8 貫目余になることを示し，「年中始末をすべし」と説いている。

の縁組より内證うすくなりて，家業の障となる人数しらず」というような時勢になっていると西鶴は見ており，それに対して「商人のよき絹きたるも見ぐるし」といった感想を示している（同，巻一の四）。しかし守りの場合には，攻めの場合の「万事に始末をすべし」といった強い教訓調の文体で書かれているものはなく，むしろ「始末」を忘れる人間の弱さを描くことに主眼があったのかもしれない。ともあれ攻守いずれにしても，油断なく「始末」を続けることは，西鶴にとって町人として必要なことと考えられていた。

(4) 正直

商人のあり方として正直を賞する言及も西鶴作品には多い。その一例として『織留』巻二の二の中の挿話がある。この挿話では，大坂で行き詰まり薩摩に流れてきて，油売りをしていた商人が，参詣した神社で，見知らぬ少女から，母を養うために金が必要なので古い絹一巻きを買ってもらいたいと頼まれる。商人は彼女を助けるため，絹は受け取らずに銀 20 匁を渡そうとしたが，少女はただではお金は貰えぬとその絹を置いていってしまう。ところが，戻ってから，その絹が世に稀な高価な古唐織りであることがわかり，商人は正直に返却をしようとするが，少女は行方知れずで果たせない。致し方なく参詣した神社の果報と考えて大判金 80 枚でそれを売って，その後次第に分限となったという話である。

この商人について西鶴は，「大坂より爰（ココ）に来ての住家（ぢうか），人皆見および，其身一代のはたらき，是町人の鑑（かゞみ）ぞかし。殊更正直を本として，すゑ〳〵目出度は，そなはりし仕合なり」と結んでいる。人々は皆，彼の暮らし方を見ており，町人の鑑と考えている。とりわけ正直を基本として豊かになったのは，そのような人格を持っていた幸せだという評である。

これに対して偽りの行為は，必ず破綻するか因果応報の報いを受けるものとして描かれている。『永代蔵』に，菊屋の善蔵という情け知らずの伏見の質屋の話がある。菊屋は，初瀬観音の見苦しく傷んでいる戸帳がいずれも時代ものの唐織であることに一人気付く。そこで，観音信仰を装い足繁く参詣し，大判金一枚が必要な御開帳を三度も行って寺に取り入る。その上で，新しい戸帳を寄進し，古い戸帳を不要品として貰い受け，それを茶入れの袋地や表具切に売って大金を手にする。この菊屋の評価とその後を西鶴は，「観音信仰にはあらず，是をすべき手だて。さてもすかぬ男。一たびはおもふまゝなりしが，元来すぢなき分限，むかしより浅ましくほろびて……人は酔（ゑは）されぬ世や」（『永代蔵』巻三の三）と書いている。このような偽りで金を手にする者は「すかぬ男」であり，そのようにして得た金は「すじなき分限」である。世間の人々は，そういったことには酔わされないものであり，この菊屋も滅びたという物語としている。

同じく『永代蔵』に登場する越前敦賀の利助も偽りの商いで破滅する。荷ない茶屋から始めて才覚一つで茶の大問屋になった利助は，その後，悪心がおこって，出がらし茶を買い入れて，それを混ぜた茶を売り利益を上げるが，発狂衰弱して死んでしまう。この利助の話にちなみ，西鶴はさま

ざまな詐欺まがいの商法や人道に悖る利得を列挙して，「いかに見過なればとて，人外なる手業する事，適(たま)〳〵生(しやう)を受て世を送れるかひはなし」（『永代蔵』巻四の四）と評している。また，『織留』に登場する或る問屋は，出入りの手代が置き忘れた銀 800 匁を隠匿し，金を渡したと嘘をいい，その手代を自害に追い込んだ。しかし，その後，その噂が「世上よりいひ立」られるようになり，商売は傾き，家にも不幸が起こり，「つゐには此家，目前に絶たり」と没落する（『織留』巻一の二）。

「すかぬ男」と評されるような遣り口，「人外なる手業」で手に入れた「すじなき分限」は続くものではない。西鶴は「人をぬく事は跡つゞかず。正直なれば神明も頭(かうべ)に宿り，貞簾なれば仏陀も心を照す」（『永代蔵』巻四の二）と，正直な商いを勧めている。

なお，注意すべきは，これらの話の多くでは，正直であるか否かが，「人皆見および」，「人は酔(ゑは)されぬ世」，「世上よりいひ」というように，世間により判定され，それが経営を左右している点である。世間による判定は信用と言い換えてもよいが，これは商いの世界では，極めて重要なことであった。西鶴は，当時の商いが対面信用で成り立っていることを，特筆すべき商慣習として書いている。例えば，次のように掛売りや当座借りは手形なしで行われていた。

> 「万事に偽りなき御代の掟をまもりけるためしには，よろづの売掛，あるひは当座借の金銀，手形なしの事なれば，借請ぬといふとてもむつかしき出入なるに，心覚の帳面ばかりにて，請払を済しぬ」（『織留』巻一の二）

また，大坂北浜の米市場では，「互に面を見しりたる人には，千石・万石の米をも売買せしに，両人手打て後は，少も是に相違なかりき」（『永代蔵』巻一の三）と，大きな取引でも約束を違えない。この市場での取引は不確かな空模様で豊凶を予測して決めたものである。それにもかかわらず「契約をたがへず，其日切(ひぎり)に，損徳をかまはず売買せしは，扶桑第一の大商」（同上）と，驚きと賞賛の目を向けている。北浜の市場は，特殊なものではあるが，それにしても，このような商慣習が出現する当時の日本の商業社会では，約束を違えない正直とそれに基づく信用は，経営を存続させる重要な条件であったに違いない。「商人は只しにせが大事ぞかし」（同，巻五の二）というように，商人に最も重要なものは，「しにせ」すなわち得意先の贔屓と信用であり，そのためには正直は不可欠な徳目であった。

5. 西鶴の二律背反(アンビバレンス)

ところで，以上のような町人の精神あるいは倫理のみを描いたのだとすれば，西鶴の町人物はせいぜい歯切れの良い文章で書かれた通俗教訓物語程度のものであったろう。西鶴の作品が，同時代の町人社会とそこで生きる人々についての鋭い観察となっているのは，すでにいわれているように[(55)]，これらの精神・倫理に対して二律背反(アンビバレント)な視線を常に失っていないからである。そこで，以下では，西

鶴の町人観の背後にある二律背反な視線を検討しよう。

(1) 金銀の希求と忌避

西鶴の作品の中でも『永代蔵』は，町人の金銀獲得へ向けてのエネルギーを賞賛する面が強い作品である。しかし，この作品でさえ，時として金銀獲得欲への冷めた視線も織り込まれている。『永代蔵』の冒頭では，先にも述べたように，「金銀を溜べし。是，二親の外に命の親なり」と致富への邁進を説いているが，同時の致富への醒めた目も忘れていない。上記の致富推奨の言葉に続けて，「人間，長くみれば，朝をしらず，短くおもへば，夕におどろく。……浮世は夢幻（まぼろし）といふ。時の間の煙，死すれば何ぞ，金銀，瓦石にはおとれり」（『永代蔵』巻一の一）という。このような無常観を踏まえた上での金銀獲得であった。

致富への上昇志向に身心を労さなくとも，それなりの生活はできる。「夢にして五十年の内外（うちそと），何して暮せばとて成まじき事には非ず」（同，巻四の五），「生あれば食（じき）あり，世に住からは，何事も案じたるがそんなり」（同，巻四の四）などという。五十年そこそこの人生，致富を目指して無理をしなくとも，なんとか暮らせるとも西鶴は考えていた。『永代蔵』には，そのような暮らしをしている人物も登場させている。大津の醤油行商喜平次は，世の貧富を思慮分別や賢愚とは別物と醒めた目で見ながら，自分の身に応じた商売をおろそかにせず「一日暮しを楽しみける」という人生を送っていた（同，巻二の二）。この喜平次に対する西鶴の描写は決して否定的でも冷たくもない。『織留』に登場する京粟田口の塩売りの楽介も老妻とその日暮らしを送る六十歳過ぎの登場人物だ。楽介は行商から帰宅後，囲炉裏に柴をくべて里芋を茶受けに煎じ茶を飲むのを最上の楽しみとし，「人の栄華もうらやむ事なく」質素な暮らしを守り，「掛銀もなく，人に済する借銭もあらず」という軽い身代で，気楽な暮らしを楽しんでいる。拾った大金を我が物としようという曲がった欲もない。西鶴は別の登場人物に，楽介を「今の世の聖人」といわせており，この生き方に憧れを示している（『織留』巻二の四）。

町人物の中に金銀に対するこのような感覚も織り込まれていることに気が付くと，好色物も金銀・致富を冷ややかに見た作品とも読める。『永代蔵』の二年前に書かれた『好色五人女』巻五も，その

(55) 中井信彦は前掲『町人』において，「才覚」「分別」「堅固」「正直」「始末」などの西鶴の町人倫理が，当時の具体的な町人世界における通用性の範囲内で表現されていること，またその世界における「才覚」とその限界を認識しつつ述べられていることを指摘し，それを「西鶴のアイロニー」と呼んでいる（同書，pp.236–249）。本稿は，この視点に刺激を受けたものであり，中井同様に西鶴の視点の複雑さを明らかにしようとしているが，どのような時代状況の中で複眼的な視点が出てきているのかという点で，中井と解釈を異にする。中井は，当時の社会を「商品と貨幣のあらたな流れにのって，創意にみちた町人がその躍動の姿をあらわしたとき，ほとんど時を同じくして，くびすを接してそこに一定の秩序がいち早くかたちをとりはじめ」それが固定化してゆく状況と見て，西鶴はその変化する社会の両面を描いたと考えている（同書，p.240）。それに対して，本稿は，西鶴は新たに展開している商業社会の本質そのものに二面的なものを見ていたという観点で分析している。

点で興味深い。この話の主人公源五兵衛は薩摩の裕福な両替屋の息子であったが，男色で身代を使い果たし，かつ相愛となった若衆二人に先立たれたことから出家する。ところがこの出家した源五兵衛に富裕な琉球屋の娘おまんが惚れる。おまんは，家出をし，若衆姿で彼を誘い，結局，二人は男女の仲となったものの，生活は赤貧で，村々で芝居狂言の真似事などをして露命をつないでいた。しかし，二人を探していたおまんの両親に連れ戻されて，源五兵衛は仕方なくおまんの親の店を継ぐこととなる。

店を引き継いで蔵を開けた源五兵衛は，そこにある巨万の財宝を見るが，彼の目に映る財宝は，次のように描かれている。

「……小判千両入の箱八百，銀十貫目入の箱はかびはへて，下よりうめく事すさまじ。牛とらの角に七つの壺あり，蓋ふきあがる程，今極め一歩，銭などは砂のごとくにしてむさし」（『好色五人女』巻五の五）(56)

黴ががはえて，「うめく事すさまじ」とか，「砂のごとくしてむさし」（砂のようで汚い）など，これらの表現には金銀に対する嫌悪感が明らかに出ている。そして，この作品は財宝を見た源五兵衛の何とも複雑な気持ちを次のように表して終わる。

「源五兵へうれしかなしく，是をおもうふに江戸・京・大坂の太夫のこらず請ても，芝居銀本して捨ても，我一代に皆になしがたし。何とぞつかいへらす分別出ず，是はなんとした物であらふ」（同上）

源五兵衛が考えるのは使い減らすことだけで，使い減らせないほどの額に，嬉し悲しく，途方に暮れるのである。しかも源五兵衛を描く作家の目は，むしろ温かい。この人物の造形には，金銀に取り憑かれることや致富へのある種の嘲笑が出ているといえる。

西鶴の代表作『好色一代男』（以下『一代男』）の主人公も，金銀に対して同様な感覚を持った人間である。この作品は，京の大金持商人の息子に生まれた世之介が，一生に経る性愛遍歴を描いている。青年期になってからの前半生は，父親から勘当され，全国を放浪しながら性愛を重ねてゆく。その間のある時，世之介が，京都に舞い戻り，両替屋の横で天秤で多量の金銀を量っている音を耳にした情景が次のように描かれている。

「奥ぶかなる家にて天秤はり口の響きさもしく耳に入て，「今おれに何程もたせたりとも欲にはせまひ。物の見事につかふて，世界の揚屋に目を覚さして，「こいよ」とよべば，一度に十人計返事さす事じやに……」」（『一代男』巻四の七）(57)

---

(56) 麻生磯次・板坂元・堤精二校注『日本古典文学大系 47 西鶴集 上』（岩波書店，1957）所収の堤精二校注『好色五人女』。

勘当され金を持っていない世之介だが，その耳には，金銀の音は卑しいものとして聞こえ，彼は，もし金があれば，営利のためではなく放蕩に使うのに，という感慨に浸る。西鶴はそのような反経済的人間を描いている。

この作品の半ばで，世之介は，父親が死んで銀二万五千貫目の遺産を相続する。仮に銀 50 目=1 両=10 万円で現在価格に換算すると，約 500 億円という巨万の富である。後半では，この遺産で，ひたすら性愛を重ねるが晩年に到っても使い切らない。そこで，次のように，残った六千両は金貨のための墓を造って埋葬してしまう。

> 「ありつる宝を投捨，残りし金子六千両，東山の奥ふかく堀埋めて，其上に宇治石を置て，朝顔のつるをははせて，かの石に一首きり付て読り，「夕日影朝顔の咲其下に六千両の光残して」と……」（同，巻八の五）

その後，世之介は，女護が島に渡り「つかみどりの女」との性愛に死することを願って，「好色丸」という船を仕立て，友人たちと船出し行方知れずとなる。そこで，この小説は終わっている。全巻最後の一文は，「恋風にまかせ，伊豆の国より日和見すまし，天和二年神無月の末に行方しれず成にけり」（同上）である。

ひたすら放蕩に貨幣を使い，貨幣を埋葬し，金銀ならざる性愛のために何方（いずかた）とも知れぬ女護が島を目指して船出する世之介は，前述の「利益のためには地獄へも船を乗り入れ」た「オランダ人の船長」の，あたかもパロディーであるかのようにさえ見える。ここには金銀欲や致富への西鶴の嘲笑が読み取れるだろう。

『永代蔵』と同年に，西鶴は『武家義理物語』を刊行している。この小説は，「義理」という，金銀や致富とは全く別の価値に生死する武士たちを描いている。ただし，ここで描かれている「義理」は世間のしがらみ，社会の秩序という意味での義理ではなく，武士の勝手な美意識という面が強い。例えば，「具足着て是みたか」という話では，侮辱を晴らすことが武士の義理であった。この話では，島原の乱に総出陣を命じられたある大名家で，四人の中小姓仲間の内の一人が，明日をも知れぬ病で先祖伝来の鎗具足で出陣することが叶わない。彼は，見舞いに来た他の三人に口惜しさを繰り返すが，具足を付けるなど無理なことと三人から嘲笑を受ける。ところが，この小姓は不思議なことに動けるほどに回復したため，嘲笑を受けた遺恨を書き置きした上で，具足を付け鎗を取って三人に果し合いを仕掛け，三人を突き殺し自分も自害する（『武家義理物語』巻三の三）[58]。

近松門左衛門は西鶴より十一歳若く，代表作は主に西鶴没後に出る。この近松も世話物で義理を描くが，この義理は，世間のしがらみ・秩序である。そのしがらみとしての義理と人情の間で苦し

（57） 同上『西鶴集 上』所収の板坂元校注『好色一代男』。
（58） 前掲『新編西鶴全集』（第 3 巻・本文篇，勉誠出版，2003）所収『武家義理物語』。

む人間が近松のテーマであった。上に紹介した『武家義理物語』の義理は，この近松の義理とは全く異なり，武士の自己満足の美意識とさえいえる。

人間の金銀獲得と致富への情熱を描いた『永代蔵』と同じ年に『武家義理物語』で，西鶴は，それとは全く異なる美意識に生きている人間を何故描いたのか。あるいは，『一代男』と『永代蔵』がなぜともに西鶴の作品なのか。これらの点を考えた時，西鶴は，時代の中に，金銀を希求しながら，同時に金銀の世界を忌避する二律背反（アンビバレント）な精神を感じており，その両面を描こうとしたと考えざるを得ないだろう。

(2) 才覚と質（もとで）・仕合（しあわせ）

西鶴が，自力のみで財を成してゆく才覚に強く惹かれていたことは間違いない。しかし同時に，それが難しいことであることも十分に認識していた。

例えば，才覚のある者よりも「質（もとで）」すなわち資本を持っている者が利益をあげる時代に変わってきたと，次のように見ていた。

「古代に替り，銀（かね）が銀もうけする世と成て，利発才覚ものよりは常体（つねてい）の者の，質（もとで）を持たる人の利徳を得る時代にぞ成ける」（『織留』巻六の四）

資本を持つ者が有利であるというのは，いつの時代であれ貨幣経済の変わらぬ本質であるが(59)，それにしても，17 世紀後半に新たな経済が展開する中では才覚を発揮しうる機会はたしかに多かったのだろう。しかし，そのような営利機会も，時代の進展とともに相対的には減少して来ていた可能性は大きい。西鶴も「以前とちがひ，今はん昌の武蔵野なれ共，隅から角まで手入して，更に摑取（つかみどり）もなかりき」（『永代蔵』巻一の四）と見ていた(60)。

それとともに，「今は銀（かね）がかねを設る時節」（『永代蔵』巻五の四）という資本の力が，あらためて強く感じられるようになったのであろう(61)。その認識は，諸作品の中で，「只銀（かね）がかねをためる世の中」

---

(59) 西鶴は，そのような貨幣経済の変わらぬ本質も理解していた。例えば，『永代蔵』に登場する資力の乏しいある博多商人は，屋敷を売り払ったなけなしの五十両を手に長崎に赴く。彼の商人眼には，仕入れて利益があがる品々がわかるのだが，五十両ではとても手が出ない。その商人の無念さを西鶴は，「買（かへ）ばあがりを受るをしりながら，金銀に余慶なく，京・堺の者によい事させて，知恵才覚には，天晴（あっぱれ）人にはおとらね共，是非なき革袋に取集て五十両，爰の商人の数にはいらず」（『永代蔵』巻四の二）と書いている。

(60) 「商売に一精（ひとせい）出し見んと，心は働きながら，手振でかゝる事は，今の世の中に，取手の師匠か取揚婆々より外に，銀に成物なし」（『永代蔵』巻三の一）も同様な時代認識。

(61) 中井信彦は，当時の経済において，「一定の秩序がいちはやくかたちをとりはじめ，それが体系化し，固定化していく勢いを持ち始めた」（前掲『町人』p.240）ことが，西鶴をして「銀がかねをもふくる世」という認識を持たしめたと考えているが，秩序化，体系化，固定化よりは，ここに述べたように営利機会が相対的に減少していたことによるのではないだろうか。

(『永代蔵』巻二の三),「銀でかねもふくる事ばかりにて，只とるやうな事はひとつもなし」(『胸算用』巻四の四),「銀(かね)がかねをもふくる世なれば，せつかくかせぎて，皆人のためぞかし」(『織留』巻一の二）などと，繰り返し述べられている。

また，常に価格が変動する市場経済においては，投資や投機に付きまとうある種の運不運が不可避である。その幸運を西鶴は「仕合」と呼んでいる。例えば,「しまふた屋殿の八五郎」と呼ばれる登場人物は「唐へ抛銀(なげがね)して仕合(しあはせ)，次第分限(ぶげん)となつて」豊かに暮らしていた(『二十不孝』巻三の二)。反対に不運で破産する者もいる。敦賀に住む半農半商の榎本万左衛門は，賢く計数に明るく倹約であったが,「仕合は思ふにまゝならず，する程の事ひだり前に成て，元手をへらし」丸裸になった(『二十不孝』巻四の三)。

町人物に，才覚で財を成す話とともに，全くの「仕合」による幸運談が組み込まれているのは，このような市場経済の本質ともいえる一面を西鶴が捉えていたからかも知れない。頼母子入札で売り出された屋敷を引き当てて家持ちとなった下女の話(『永代蔵』巻一の五）や，大晦日に行われる古道具の夜市で買った煙草箱の底に小判三両が入っており「思ひもよらぬ仕合」をつかんだ話(『胸算用』巻五の一）などは単純な幸運だが，どちらの場合も，そのようなエピソードを最後に置いて一話を結んでおり，人間社会における運の存在を示唆する書き振りとなっている。

もちろん,「仕合」は商売の話としても語られている。例えば，伊丹の小醸造家の放蕩息子は，京の遊郭島原で幸運にも関東が大風だという話を漏れ聞き，直ちに大坂北浜へ急行して米と油を大量に買い込み財を成す(『織留』巻一の一)。あるいは淀の里に住む与三右衛門は大雨の時に，年々に淀川支流の谷々から流れて固まった巨大な漆の塊を見つけ，それを銀一千貫目以上に売ったことから次第に長者となった。西鶴は，この与三右衛門を評して,「これらは才覚の分限にはあらず，てんせいの仕合なり。おのづと，金がかねまうけして，其名を世上にふれける」(『永代蔵』巻六の四）と述べている。「仕合」と「金がかねもうけ」する利貸によっても，財は成されると考えていたのである。

このような時代に対する西鶴の見方をどのように考えるべきなのだろうか。もちろん，次第に才覚だけでは，財を成せない時代になってきているという感覚はある。しかし，それ以上に，新たに進展している市場経済の本質を捉え，その中での才覚に想いを馳せている面を忘れるべきではない。運不運が存在し，その不測の事態に堪えうる資本を持つ者の経営が相対的に安定しているのは市場経済の本質である。才覚は，そのような市場経済の枠内で発揮されざるを得ない。その冷厳な現実を西鶴は，次のように述べている。

> 「分限は，才覚に仕合手伝(つだは)では成がたし。随分かしこき人の貧なるに，愚なる人の富貴。此有無の二つは，三面の大黒殿(どの)のまゝにもならず」(『永代蔵』巻三の四)

しかし，それにもかかわらず，才覚のみで分限となることを唱え続けたかった所に西鶴の特色もある。

「人の分限になる事，仕合といふは言葉，まことは面〳〵の智恵才覚を以てかせぎ出し，其家栄ゆる事ぞかし。是福の神のゑびす殿のまゝにもならぬ事也」（『胸算用』巻二の一）[62]

分限になるには幸運が必要だといわれているが，それは言葉だけのことであり，本当は智恵才覚で富を成すのだという。これは，市場経済の厳しい現実を認識した上での西鶴の願望である。才覚に関しても，彼は現実と願望の間で二律背反（アンビバレント）な思いを描いていた。

(3) 「油断なく」と不確実性

前節で述べたように，再三再四「油断なく」ということを繰り返すのは，一つは運命の不思議さと人間の弱さを知るからだろう。『好色五人女』の中の多くの話は，ふとした切っ掛けから身を滅ぼす市井の女性を描いている。また町人物でも，真面目な人間が，意図せざる機会に遊びを覚えて，財を失うという話も織り込まれている[63]。この点で，「人はしれぬ物かな」（『永代蔵』巻一の二），「人程，賢て愚なる者はなし」（『永代蔵』巻五の二）という，西鶴の人間を見る目はいかにも作家である。

しかし，それと同時に，市場で金銀によって生きることの不確実性を強く感じているからこそ，西鶴が「油断なく」と繰り返している点も考えなければならない。金銀により市場で生きるには，投資あるいは投機が本来不可欠である。西鶴は，養家を栄えさせたある登場人物に，「包み置たる金子は，壱両もおほくはなるまじ。利発なる小判を長櫃（ナガビツ）の底に入置，年久敷（ヒサシク）世間を見せ給はぬは，商人の形気（かたぎ）にあらず」（『永代蔵』巻六の二）といわせている。金銀は運用をしなければ富を生まないのである[64]。しかし，その結果は必ずしも確実なものではない。市場には「仕合」というものがあるという西鶴の認識については，すでに述べた。金銀には市場での運用が不可欠であり，運用には「仕合」という不確実さが避けがたいと考えていたのである。

また，当時の新儀商人，出来商人の経営形態に特有な点も考えなければならない。第2節（3）で見たように，当時は新たな経済が展開する中で営利機会はあった。しかし，それだけに，その機会に挑戦する起業者には小資本で経営基盤が脆弱な者が多かった。いきおい，彼らの経営は，「昼夜油断のならざる利を出す銀（かね）かる人の身体（しんだい）」（『胸算用』巻一の一）であり，そのような借り入れによる経営はいっそう不確実なものであった。しばしば致富談の作品と見なされる『永代蔵』30話の中には，第2節（2）で述べたように，破産談あるいは破産談も組み込まれた話が8話も入っている。また

（62）「おのれが性根によつて，長者にもなる事ぞかし」（『永代蔵』巻一の三）も同様。

（63）例えば，『永代蔵』巻一の二「二代目に破る扇の風」，『織留』巻三の三「色は当座の無分別」。

（64）『胸算用』巻四の四に登場する京の唐糸商に，値上がりを見込んで思い切って吉に出るか凶に出るかの買置きをしないかぎり「一生替ることなし」だといわせている。また，この商人は，そのような投機をすることが「商人心」だともいっている。一方『織留』巻一の一で「近年，町人身体（しんだい）たゝみ分散にあへるは，好色・買置此二つなり」と述べているように，「買置」は「分散」すなわち破産の主要因でもあった。

『胸算用』は，上中下さまざまな町人階層の大晦日を描いた作品だが，その中には，掛買い，掛売りで商売をしながら，予想通りには収支が合わず大晦日に精算ができなくなる町人の姿が描かれている。

例えば『永代蔵』には，「是をおもふに，当所（あてど）のかならず違ふものは世の中」（『永代蔵』巻二の二[65]），「朝の繁昌夕に消て，かくも又なりはつる世の習ひ」（『永代蔵』巻三の五），「空（そら）定めなきは人の身体（しんだい）」（『永代蔵』巻四の二）といった町人社会の不確実さについての言及がしばしば出て来る。このような不確実性は，市場経済の中で生きることに常に付きまとう定めであるとともに，この時代の町人が置かれていた状況でもあった。「定めがたきうき世なれば，定まりし家職に油断なく」（『胸算用』巻三の四）というのは，避けがたい不確実性を強く感じるからこそでもある。ここにも西鶴の二律背反（アンビバレント）な想いを見るべきだろう。

(4)「正直」と「いつわりの世中」

正直が，当時の町人社会の中で信用を確立するために必要な徳目であったことはすでに述べた。しかし，そこでの「正直」が天地神明にかけて一点の曇りなき正直であったわけではない。また，町人社会が，そのような正直で成り立っていたわけでもない。

『胸算用』は，借金取りをごまかして大晦日の一日を切り抜けるさまざまな階層の町人を描いている。高尾一彦は，それを「庶民大衆」の「不正直の例話集」であり，また，それらの不正直が「庶民的寛容さの範囲内」にあると述べている[66]。『胸算用』の登場人物たちは「庶民大衆」というよりは多様な町人というべきであろうが，それらの町人に対する西鶴の目は温かく，西鶴が道学者のいうような正直を求めていたわけではないことがわかる。

『永代蔵』にも，ある種の不正直に対する温かな目がある。すでに述べたように『永代蔵』「才覚を笠に着る大黒」の新六は黒犬の黒焼きを「狼の黒焼」と偽って売るが，これは丸裸無一文の男が生き残るのに許される範囲内の嘘である。

「心を畳込古筆屏風」（『永代蔵』巻四の二）の博多の落ちぶれた商人の話も興味深い。この男は，家を処分して得たなけなしの五十両を手に再起を期して長崎に赴くが，五十両程度の元手では長崎商いには手が出せない。自棄になって丸山遊郭で太夫を揚げたところ，太夫の枕屏風が定家などの古筆切れを隙間なく貼ったものであった。それに気付いた男は，その後うまく仕向けて太夫と懇ろになり，まんまと屏風を貰ってしまう。その屏風を上方で大金で売り，それを元手に商売を再建した商人は，太夫を請け出し十分な嫁入り支度を調えて好きな男と結婚させた。この男に対する世評を西鶴は，「「一たびは傾城（けいせい）をたらすにといへど，是らは悪（にく）からぬ仕かた。其目利（めきき），ぬからぬ男」と，世

---

(65) この一文は，堅実に醤油の小商いをしていた商人が，落雷により収支が合わなくなったことを評して書かれている。落雷という自然災害ではあるが，西鶴は，そこに商いの世界の不確実性を象徴させていると考えるべきである。

(66) 高尾一彦『近世の庶民文化』岩波書店，1968，p.133。

間皆是をほめける」と書いている。前節で紹介した初瀬観音の戸帳を騙し取った菊屋と似た所はあるものの，両者の置かれていた状況と後日の振舞いには大きな違いがある。嘘にも，世間が「悪からぬ仕かた」と許す状況と仕方があったのである。

「悪からぬ仕かた」の範囲内での不正直は許されるという考え方の背後には，当時の町人社会が，偽りの上に動いているという感覚がある。例えば，問屋は羽振りが良いと見せることで信用が得られた。それを経営の実態通り内情が危ないことを見せたらどうなるか。「実体なる所帯になせば，かならず衰微して，家久しからず」（『永代蔵』巻二の五）という結果になる(67)。死期の迫った駿河の虎屋善左衛門という大商人は，息子たちに，「世の聞え斗に」，二千両しかない現金を八千両あるように遺言状を書くことを伝える。それは，「手前よろしき人には，大分の金銀をもあづけ，縁組の為にもなり。彼是，勝手のよきおほし」，「人間は外聞」という経営上の判断であった（『二十不孝』巻二の四）。

美作の萬屋は，店の構えを大きくし商売を大規模に見せかけた両替屋を始めて，多くの金銀を預かることができた。この店の経営は「人の内證は張物」（『永代蔵』巻五の五）と評すべき内実のないものであったが，それはこの店にかぎらない。「御内證の事，世ははり物」（同，巻六の二）ということは，当時一般にいわれる警句であった。多くの商人がお稲荷様を拝んだのは，「身体の尾が見えぬやうに守らしやる神」（『胸算用』巻一の三）だったからでもある。

律儀な手代は，遠隔地との商売に向かないという面もあった。「遠国へ商につかひぬる手代は，律義なる者はよろしからず。……大気にして主人に損をかけぬる程の者は，よき商売をもして，取過しの引負をも埋る事はやし」（『永代蔵』巻二の五）というように，律儀さより或る種の投機的能力が必要だと西鶴は考えていた(68)。

売り口上も正直だけでは商売にならない。「和国の商ひ口とて，「利徳をとらぬ」と空誓文をたつれば，是に気をゆるし，何によらず買求むる世のならはしなり」（同，巻六の二）とあるように，口先だけの「空誓文」で客の購買を誘うのが世のならわしであった。だからこそ，「年中の誓文を，十月廿日のゑびすかうに，さらりとしまふ」（同上）という誓文祓の神事があって，商人が一年中についた嘘を御破算にするのである。

このように，町人社会自体が偽りの上に成り立っている面がある。見栄を張った生活の仕方も含めて「世間体ばかり皆いつはりの世中」（同，巻一の五）というのも，西鶴の町人社会観であった。その「いつはりの世中」で生きてゆくためには，「正直にかまへた分にも，埒は明ず」（同，巻二の二），道学者のような正直を通すことはできない。しかし，あらゆる不正直が許されるわけではなく，世間の許容の範囲内にある「悪からぬ仕かた」でなければならなかった。『永代蔵』の冒頭には，「人

---

(67)『好色一代女』（前掲『日本古典文学大系 47 西鶴集 上』所収）巻五の四にも「惣じての問屋長者に似たり。中々あやうき世わたり」とある。

(68) 長崎での輸入品交易に関しても，「金銀すぐれてもうくる手代は，算用は合てつかふ事にかしこく，律儀に構て始末過たる若ひ者は，利を得る事にうとし」（『永代蔵』巻五の一）とある。

は実あつて，偽りおほし」とある。西鶴は，人間の誠実さは信じていた。しかし，その「実」のある人間が，「悪しからぬ仕方」とはいえ，「偽り」を持って生きなければならないところが町人の世界でもあった。正直についても，西鶴の視線は二律背反（アンビバレント）であったといえるだろう。

6. むすび——西鶴における経済思想の基底——

町人社会についての西鶴の二律背反（アンビバレント）な視線を検討したが，それらの視線を生み出しているものとして，当時の町人社会に関する彼の感覚があり，それが物の見方の基底となっている。その基底となっている感覚を不確実性，虚構性，匿名性という三点にまとめてみたい。

不確実性は，貨幣を元手に市場で生きる町人の営みにとって避けがたいものである。商業であれ都市の手工業であれ，需給定めなき市場を目当てとした投資が不可避であり，同業者や新たな参入者との間の競争があり，またある種の運不運も付きものであった。もちろん農業であっても天災や豊凶はあったが，農業の場合には，本来自給でも成り立つ営みであり，また競争より共同の面が強く，はるかに不確実性は小さい。町人の営みが不確実なものであるという感覚は西鶴の作品に常に流れているものだろう。

虚構性は，前節で見た「いつはりの世中」という社会感覚である。これも，つかみどころのない不特定多数の者からなる市場の中で，その市場の反応を考えて生きなければならない者が，社会に対して抱く感覚といえる。その点では，推測に過ぎないが，俳諧としての西鶴の活動に，すでにその感覚があるように思える。俳諧としての西鶴は，特定の同人を対象とした活動だけではなく，矢数俳諧のような不特定多数に訴える興業を行っていたし，また「阿蘭陀西鶴」あるいは「ばされ句の大将」と呼ばれるような外連味のある作風で大向こうを唸らせていた。俳諧師の西鶴にとって，聴衆や読者は定めなき市場であり，それに合わせた活動をしていた。

『一代男』も社会を虚構と見る感覚で描かれた作品である。主人公世之介の性愛遍歴の相手は，54話で全て異なり，生涯を連れ添うような永続性はない。また多くの話が廓を舞台としており，そこは疑似恋愛を行う偽りの世界である。しかも，その偽りは廓だけのものではない。『置土産』の序文冒頭で西鶴は廓について，「世界の偽（うそ）かたまつてひとつの美遊（びゆ）となれり」と書いている。廓における偽りは，世の中の偽りの洗練された象徴とも考えられていたのである。

ただし世之介は，永続性のない付き合い，偽り世界での男女の仲であっても，そのほとんどの相手に対して，その時その時に誠実であろうとしている。この点で『一代男』は，虚構の中での誠実さを描こうともしている。そして，その感覚は，すでに述べた『永代蔵』冒頭の「人は実あつて，偽りおほし」という町人社会観と共通するものである。

町人社会のこの虚構性を生んでいる要素の一つが匿名性である。町人の生きる都市社会は相互に深くは知らぬ人々が集まっていることを特色とする。西鶴の時代にあっても江戸，大坂，京のよう

な大都市は，そのような性格を持っていた。『一代男』の世之介は，勘当の身で，ある時，乳母の妹を頼り大坂の浮世小路に転がり込む。その乳母の妹の暮らしぶりは，「花屋・たばこきり・駕籠舁（かごかき）の西隣に，何をして世をわたるともなく，柿ぞめの暖簾（のれん）かけて，女の一人暮せり」（巻三の三）と描写されている。農村であれば，「何をして世をわたるともなく」という住まい方はありえない。

『好色一代女』の女主人公も，この匿名性の中で生きている。彼女は，京，大坂，江戸などを移りながら色々な奉公を転々とする。その転職は，「肝煎渡世」，「奉公人宿」，「人置」などという奉公人の斡旋業を介して行われ，身元や経歴を偽って奉公に上がっていることもある（巻三の一）。また，年季を待たず姿をくらまして職を移ることも一度ならず行っている（巻二の三・巻四の二）。あるいは，「万物縫い仕立屋」の看板を隠れ蓑に路地裏で暮らすこともできた（巻四の二）。これらは小説の世界の話とはいえ，そこから見えてくるのは，西鶴が，当時の都市を，身元の余り明らかでない者たちが暮らしてゆける匿名性のある空間と考えていたことである。

芭蕉は，西鶴没年の翌年，元禄７年（1694）に，大坂で亡くなる。その亡くなる前の，最後から二番目の句が，「秋深き隣は何をする人ぞ」である。逗留先での句とはいえ，隣人であっても何をしている者かわからないという句には，西鶴と同様な都市の匿名性の感覚がよく表れている。

ところで，匿名の社会は，親子代々地縁血縁で相互に知り尽くした者たちからなる農村の強固な共同体とは著しく異なる。匿名性のある社会は，すでに述べたように，「金銀さへもちければ，自由のならぬといふ事なし」というような「自由」がある社会である(69)。しかし，その反面で，共同体の相互に助け合う社会的保障はない。『織留』巻三の四の「何にても智恵の振売」には，むつかしい問題の「談合相手」を生業にする男が出て来るが，これも，相談ができる長老や親族を欠いた都市だからこそありうる職業だろう。

市場を頼りに生きる不確実性，定めなき市場という虚構性，不特定多数の者からなる匿名性が当時の市場にも町人社会にもあった。また信用でさえ，その匿名の市場と社会で確立される限り，何かしらのの偽りも伴う「正直」に依るものであり，虚構の色彩は払拭できない。西鶴の作品は，町人社会をそのようなものとややシニカルに認識しながらも，この世界で前向きに生きることを，陽性に肯定している。

しかし，それを人間の理想の生き方と考えていたのか。その点では，さまざまな町人の致富と没落を描いた『永代蔵』の最後が，京都北山の豊かな農家の話で締めくくられているのは象徴的である。この家は，三世代の夫婦が揃って健やかで，神をまつり仏を信じ，しかもその三組の夫婦それぞれが幼なじみで，土地の結び付きの中で結婚している。これは，不確実性，虚構性，匿名性の中に生きる町人とは正反対の生活である。この家族の生活を，「ためしもなき仕合なり」と評し，『永

(69)『一代男』巻三の一では，諸国放浪の途次，世之介は上方に流れ戻り，富裕な旦那衆と，京で金にまかせて美人を集めた遊びをする。京都のその自由が，「万の自由みやこなれや都」と称えられている。

代蔵』は全巻を閉じている。そこには，基礎の堅い農民の生活への西鶴の憧れが感じられるとともに，町人社会に対する彼の二律背反（アンビバレント）な想いが読み取れる。

以上のような経済観，町人社会観をなぜ西鶴が抱いたのかについては，第 2 節で概観した当時の経済実態と結びつけてみなければならない。西鶴の作品は，新たな経済が勃興し成長してくる時代を背景に書かれている。それは，17 世紀前半の商業のあり方はこわされつつあるものの，新たな経済はまだ体制として固まってはいない時代である。

このような時代が終わるのは，西鶴以降である。例えば，幕府が流通統制に乗り出すのは，1720 年代であることは，第 2 節で見た。また，乾宏巳の「大坂町人社会と西鶴」[(70)]によれば，西鶴以後に，家業という継続的な経営組織体が一般的に成立することで，経済の体制が固まってくる。宗門人別帳の分析から乾は，大坂道修町で屋号のある家は，万治 2 年（1659）には 52 %であったが，それが享保 5 年（1720）には 93 %となっているという。屋号があるということは，家が継続的な経営組織体となっていくことの一つの象徴である。個々の町人は，智恵才覚で生きる存在ではなく，家の維持に努める一員となり，家の存続のための道徳が形成されてくる。そのしがらみの中で苦しんでゆくのが近松門左衛門が世話物で描く主人公たちであり，それは西鶴以後の町人の世界である。

西鶴の経済思想と町人社会観は，17 世紀前半の旧体制と上記の新体制の間に生まれたものである。その時期は，市場と都市がいまだ体制化されず，比較的むきだしとなった時といえる。不確実性，虚構性，匿名性は市場社会・都市社会の本質的特性といってよいが，西鶴の時代は，江戸時代の中で，そのような特性が初めて社会に現れてくるとともに強く感じられた時であった。虚構性は市場で生きることに付きまとうことである。なりわいの不確実性は別の見方をすれば可能性であるかもしれない。社会の匿名性は自由の裏側ともいえる。新たに生じたそのような社会の中で生きる町人のさまざまな姿が，西鶴が描いたものである。もちろん西鶴が生きたのは，いわゆる前期的商業の世界である。作品にも大坂北浜の米取引のような領主的商品経済の要となるような商売が出てくる。広汎で豊かな生産力の上に緊密な分業が成立していた経済ではないし，投機性を帯びた遠隔地交易の話もしばしば作品に登場する。しかし，そのような歴史性を伴いながらも，新たに登場した市場経済，都市社会の普遍的な本質を早くも複眼的に捉えている所に，西鶴の経済思想の特質を認めるべきだろう。

（70） 乾宏巳「大坂町人社会と西鶴」『西鶴新展望』勉誠社，1993。

要旨: 井原西鶴は，1680 年代から 90 年代にかけて，町人を題材とした作品を残しており，そこからは，西鶴の経済思想が析出できる。しかし，従来の研究は，その思想を必ずしも当時の経済と適正に結びつけて考察していない。本稿では西鶴の時代を，市場経済と都市社会が展開をしはじめ，それが権力に妨げられることが比較的少なかった成長期と捉え，その中で西鶴が，市場と都市の本質について，その光と影の両面を鋭く見つめていたことを明らかにする。

キーワード: 井原西鶴，日本永代蔵，世間胸算用，西鶴織留，経済思想，町人倫理